

## 詩語「崑崙」の誕生

大野圭介

富山大學

### 緒言

崑崙山<sup>①</sup>といえは一般には中國の西方にあり、大地の中心にあつて天地の通路となる「天柱」(『神異經』)であつて、西王母が棲み(『穆天子傳』等)、神々がここから天界へ上下する傳説の山と認識されている。また崑崙山は九層から成り(『楚辭』天問)、登れば不死が得られ昇仙できる場所でもあつて、のちには道教の聖地となり、今日では新疆ウイグル自治區とチベット自治區の間から青海省に至る山脈に崑崙山脈の名が當てられている。

こうした崑崙の持つ宗教的機能については、これまで曾布川寛『崑崙山への昇仙』(中公新書、一九八一年)、小南一

詩語「崑崙」の誕生(大野)

郎『中國の神話と物語り』(岩波書店、一九八四年)、御手洗勝「崑崙傳説と永劫回歸」(同『中國古代の神々』所收、創文社、一九八四年)、中鉢雅量『中國の祭祀と文學』(創文社、一九八九年)、伊藤清司『死者の棲む樂園』(角川選書、一九八八年)等數多くの先行研究があり、豊かな成果を上げている。また崑崙の名の原義についても、「渾沌」の轉<sup>②</sup>、メソポタミアの聖なる建築物 *ziggurat* の音譯<sup>③</sup>、「魂」の長音化<sup>④</sup>、「園」の長音化<sup>⑤</sup>など諸説あり、道教の聖地とされる名山には甘肅省の崆峒(空同)山<sup>⑥</sup>など疊韻の名が見られることも、同じく疊韻の崑崙との關連を示唆する事實である。

その一方で、崑崙の名が詩語として定着し、そのイメージが定まるまでに經てきた過程は、決して單純なものではない。そもそも古代詩歌において山が登場する際には、ただ名を擧げるだけで、それ自體の山容や山水自然の美を描くことは殆どないことに注意しなければならない。

たとえば『詩經』を見ると、そこに崑崙の名は見えないばかりか、固有の名稱をもつ山も極めて少ない。小尾郊一氏は『詩經』に描かれた山水自然の描寫を分析し、「後世

のような山水美あるいは自然物の美しさを詠ったものはあらわれないし、純客觀的の敘景詩はもちろんのこと現われていない。……詩經の詩における自然は、概して比興的と言わざるを得ない」と結論づける。『詩經』で比較的出现頻度が高いのは南山であるが、川合康三氏は「大體は各地の南の山であつて、終南山に特定できない。「秦風・終南」の篇は終南山を指すには違いないが、「終南何か有る、條有り枝有り。君子至る、錦衣狐裘」、山にはそこにふさわしいものがあるように、と唱い起こす戀愛詩の興として用いられているもので、これは後代に繼承されていかない。ただ小雅「天保」では南山が君主をことほぐ言葉を連ねた最後の章は、南山がその後を持ち續ける意味の一つをすでに含んでいる。

- 如月之恆      月の恆の如く
- 如日之升      日の升るが如く
- 如南山之壽      南山の壽の如く
- 不騫不崩      騫かけず崩れず
- 如松柏之茂      松柏の茂るが如く

無不爾或承      爾なんじに承くる或あらざる無し  
山が恆久不變の存在であることから、長壽への祈念に結びつけられている。山の持つ靈性がここでは永世の象徴として働いているのである。」と指摘する。<sup>⑤</sup>

『詩經』において南山以外で固有の名を持つ山は、大雅「崧高」の四嶽、同「韓奕」の梁山と魯頌「閟宮」の泰山・龜蒙のみである。

- 崧高維嶽      崧おおいに高きは維これ嶽、
- 駿極于天      駿おほいさ天を極む。
- 維嶽降神      維れ嶽は神を降し、
- 生甫及申      甫及び申（仲山甫と申伯）を生めり。（崧高「一章」）
- 四嶽を神の降る山として、仲山甫と申伯の出生を導くのに用いている。
- 奕奕梁山      奕奕たる梁山、
- 維禹甸之      維れ禹之を甸おさむ。
- 有倬其道      倬あきかなる其の道有りて、
- 韓侯受命      韓侯 命を受けた。〔韓奕「一章」〕

梁山は禹の治めた聖なる山とされ、韓侯の受命を導くために用いられている。これらはいずれも山そのものの情景は描かれず、山名を擧げるだけでその神聖な雰囲気象徴できたと考えられる。

これらに比べると、「闕宮」の山の描寫はいささか異なる。

泰山巖巖 泰山巖巖たり、

魯邦所詹 魯の邦の詹(瞻)る所。

奄有龜蒙 龜と蒙のやまを奄有し、

遂荒大東 遂に大東を荒む。

至于海邦 海邦に至れば、

淮夷來同 淮夷も來たり同ず。

莫不率從 率從せざる莫し、

魯侯之功 魯侯の功なり。(「闕宮」六章)

ここでの泰山は神とは關連付けられておらず、龜・蒙はただ名を擧げるだけで、靈性を感じさせる表現は一切ない。

これらの山々は國土の廣がり表現することによって魯侯の功績を強調する役割の方が大きいと言えるが、泰山は

詩語「崑崙」の誕生(大野)

「巖巖」という形容詞でその神々しいさまが描かれるのであり、神山としての性格の名残をとどめているとはいえる。

このように『詩經』には崑崙の名こそ見えないものの、それと同様に名を擧げるだけで靈性を感じさせるような神山は各地に存在したのである。しかしその山容には殆ど關心が示されず、「山有○○」という句が『詩經』に十九例もあるように、むしろその山に存在するもの、あるいは産出するものの方へ關心が注がれていた。<sup>⑨</sup>

では崑崙はどのような形で文獻に立ち現れ、變容してきたのであろうか。本論では崑崙の原義や宗教的機能については立ち入らず、それがどのように表現されてきたかに注目していくことにする。

### 一 知識としての崑崙

崑崙の描寫について考察する前に、崑崙山自體について説明する記述がある文獻を確認しておこう。まず擧げられるのは『山海經』<sup>⑩</sup>海内西經の

海内崑崙之虛、在西北、帝之下都。崑崙之虛、方八

百里、高萬仞。上有木禾、長五尋、大五圍。面有九井、以玉爲檻。面有九門、門有開明獸守之、百神之所在。在八隅之巖、赤水之際、非仁羿莫能上岡之巖。

赤水出東南隅、以行其東北。

河水出東北隅、以行其北、西南又入渤海、又出海外、

卽西而北、入禹所導積石山。

泮水・黑水出西北隅、以東、東行、又東北、南入海、

羽民南。

弱水・青水出西南隅、以東、又北、又西南、過畢方

鳥東。

昆侖南淵深三百仞。開明獸身大類虎而九首、皆人面、

東嚮立昆侖上。

開明西有鳳皇・鸞鳥、皆戴蛇踐蛇、膺有赤蛇。

開明北有視肉・珠樹・文玉樹・玕琪樹・不死樹。鳳

皇・鸞鳥皆戴**厭**。又有離朱・木禾・柏樹・甘水・聖

木・曼寗、一曰挺木牙交。

海內昆侖の虚は、西北に在り、帝の下都なり。昆侖の虚は、方八百里、高さ萬仞。上に木禾有り、長さ五

尋、大いさ五圍。面に九井有り、玉を以て檻と爲す。面に九門有り、門に開明獸有りて之を守り、百神の在る所なり。八隅の巖、赤水の際に在り、仁羿に非ざれば能く岡の巖を上るもの莫し。

赤水は東南の隅に出で、以て其の東北に行く。

河水は東北の隅に出で、以て其の北に行き、西南して又た渤海に入り、又た海外に出で、卽ち西して北し、禹の導く所の積石山に入る。

泮水・黑水は西北の隅に出で、以て東し、東に行き、

又た東北し、南して海に入る、羽民の南なり。

弱水・青水は西南の隅に出で、以て東し、又た北し、

又た西南し、畢方鳥の東を過ぐ。

昆侖の南淵は深さ三百仞。開明獸は身大いさ虎に

類して九首、皆人面、東嚮して昆侖の上に立つ。

開明の西に鳳皇・鸞鳥有り、皆な蛇を戴き蛇を踐み、

膺に赤蛇あり。

開明の北に視肉・珠樹・文玉樹・玕琪樹・不死樹有り。鳳皇・鸞鳥皆な**厭**を戴く。又た離朱・木禾・柏

樹・甘水・聖木・曼兌有り、一に曰く挺木牙交と。

という一連の記述である。ここでは崑崙山自體の山容が八百里四方で高さ萬仞と描かれ、そこに存在するものも木禾が生え、九つの井戸があつて玉の手すりがあり、九つの門を開明獸が守っていると詳細に描かれる。その後には崑崙から流れ出る川や、開明獸の「虎に類し九首」という恐ろしい姿と、その周圍の鳳凰・鸞鳥・不死樹などの樂園を思わせる風物の羅列が續く。

また大荒西經にも「崑崙之丘」の周圍を取り巻く弱水や炎火の山の情景が詳しく記される。

西海之南、流沙之濱、赤水之後、黑水之前、有大山、名曰崑崙之丘。有神、人面虎身、有文有尾、皆白、處之。其下有弱水之淵環之、其外有炎火之山、投物輒然。有人、戴勝、虎齒、有豹尾、穴處、名曰西王母。此山萬物盡有。

西海の南、流沙の濱、赤水の後、黒水の前、大山有り、名を崑崙の丘と曰う。神有り、人面虎身、文有り、尾有り、皆な白、之に處り。其の下弱水の淵有りて之

詩語「崑崙」の誕生（大野）

を環り、其の外に炎火の山有り、物を投ずれば輒ち然ゆ。人有り、勝を戴き、虎の齒、豹尾有り、穴處し、名を西王母と曰う。此の山は萬物盡く有り。

海内西經の崑崙も羿<sup>①</sup>でなければ上れない険しい巖が描かれるが、大荒西經では弱水の淵が周圍を取り巻き、外にはあらゆる物が燃えてしまふ炎火の山もあり、さらに「虎齒、有豹尾」の恐ろしい姿をした西王母もいるなど到達し難さがさらに強調される。一方で「此山萬物盡有」とも云い、到達することができればそこは何でもある樂園である。

『楚辭』天問には崑崙に關する問いが見える。

崑崙縣圍、其尻安在。增城九重、其高幾里。四方之門、其誰從焉。西北辟啓、何氣通焉。

崑崙の縣圍、其の尻<sup>お</sup>るところ安くにか在る。増城は九重、其の高さ幾里ぞ。四方の門、其れ誰か焉<sup>こよ</sup>從りす。西北は辟啓す、何の氣か焉に通ずる。

この問いに對する答えは、實はほとんど『淮南子』墜形訓の中に出ている。「天問」の傍線と同じ傍線が引かれてゐる箇所がその答えである。

禹乃以息土填洪水以爲名山、掘昆侖虛以下地、中有增城九重、其高萬一千里百一十四步二尺六寸。上有木禾、其修五尋、珠樹・玉樹・琿樹・不死樹在其西、沙棠・琅玕在其東、絳樹在其南、碧樹・瑤樹在其北。旁有四百四十門、門開四里、里開九純、純丈五尺。旁有九井、玉橫維其西北之隅、北門開以內不周之風、傾宮・旋室・縣圃・涼風・樊桐在昆侖閭闔之中、是其疏圃。疏圃之池、浸之黃水、黃水三周復其原、是謂丹水、飲之不死。河水出昆侖東北陔、貫渤海、入禹所導積石山、赤水出其東南陔、西南注南海丹澤之東。赤水之東、弱水出自窮石。至於合黎、餘波入於流沙、絕流沙南至南海。洋水出其西北陔、入於南海羽民之南。凡四水者、帝之神泉、以和百藥、以潤萬物。

禹 乃ち息土を以て洪水を填め以つて名山を爲し、昆侖虛を掘つて以つて地に下す（低地を埋めた）、中に増城九重有り、其の高さ萬一千里百一十四步二尺六寸。上に木禾有り、其の修さ五尋、珠樹・玉樹・琿樹・不死樹 其の西に在り、沙棠・琅玕 其の東に在り、絳

樹 其南に在り、碧樹・瑤樹 其の北に在り。旁に四百四十門有り、門の間は四里、里の間は九純<sup>⑬</sup>、純とは丈五尺なり。旁に九井有り、玉橫（高誘注に「不死の藥を受ける器」）其の西北の隅に維く、北門開かれて以つて不周の風を内れ、傾宮（大宮殿・旋室（玉の部屋・縣圃・涼風・樊桐は昆侖の閭闔（門の名）の中に在り、是れ其の疏圃なり。疏圃の池は、之を黃水に浸し（注いでいる）、黃水 三周して其の原に復る。是れ丹水と謂う、之を飲めば死せず。河水 昆侖の東北陔より出で、渤海を貫く、禹の導く所の積石山より入るなり。赤水 其の東南陔に出で、西南して南海丹澤の東に注ぐ。赤水の東、弱水 出ずるに窮石よりして、合黎（甘肅省）に至り、餘波（支流）は流沙に入り、流沙を絶り南して南海に至る。洋水 其の西北陔に出で、南海羽民の南に入る。凡て四水なる者、帝の神泉、以つて百藥を和し、以つて萬物を潤す。

先に擧げた『山海經』海内西經の崑崙に關する記述も『淮南子』と多くの部分が重なり（「……」線で示してある）、

「仁羿に非ざれば能く岡の巖を上る莫し」という記述は「四方の門、其れ誰か焉よりす」の答えとなつてゐる。「淮南子」は前漢の淮南王劉安が編纂させたものであるが、「天問」にこれを踏まえたとみられる問いがある以上、ここに記された崑崙に關する知識は戰國期から傳承されてゐたものと考えられる。

これらに記される崑崙の情景は、

- ・九重の増城は高さ一千里
- ・九つの井戸と玉の欄干
- ・玉の宮殿
- ・周圍に多くの門
- ・五尋の木禾
- ・玉の樹木と不死樹
- ・流れ出る黄河・長江・赤水・弱水
- ・深さ三百仞の淵

といったものであるが、いずれもその靈妙さを強調するものであつて、後世の詩人が描くような山水の美とは異なる性格のものである。

詩語「崑崙」の誕生（大野）

『淮南子』は雜家に屬する書物ではあるが、その内容は道家の色彩が濃いものであり、『楚辭』や『山海經』も巫祝との關連がつとに指摘されている。とりわけ「天問」は巫祝或いは王族の子弟の知識を試すための問題集であるとする説もある<sup>15</sup>。これらの神山の描寫は、不死を象徴するよ  
うな靈妙な風物など、専ら巫祝や神仙家の關心事を詳細に描いており、山自體の美を愛でるような意識はまだないと  
言える。

崑崙の詳細な記述は『山海經』西次三經にも見えている。西次三經は崑崙に連なる山系が、『山海經』の他の部分には見られない裝飾豊かな表現で描かれる。

又西北四百二十里、曰崑山、其上多丹木、員葉而赤莖、黃華而赤實、其味如飴、食之不飢。丹水出焉、西流注于稷澤、其中多白玉、是有玉膏、其源沸沸湯湯、黃帝是食是饗。是生玄玉。玉膏所出、以灌丹木。丹木五歲、五色乃清、五味乃馨。黃帝乃取崑山之玉榮、而投之鍾山之陽。瑾瑜之玉爲良、堅粟精密、有濁澤而光。五色發作、以和柔剛。天地鬼神、是食是饗。君子服之、

以禦不祥。自**崋山**至于鍾山、四百六十里、其間盡澤也。是多奇鳥・怪獸・奇魚、皆異物焉。

又た西北四百二十里を、**崋山**と曰い、其の上は丹木多く、貝まき葉にして赤莖、黃華にして赤實、其の味は

飴の如く、之を食すれば飢えず。丹水こ焉より出で、西流して稷澤に注ぐ、其の中に白玉多く、是に玉膏有り、其の源は沸沸湯湯しょうしょう、黃帝是れ食し是れ饗す。

是に玄玉を生ず。玉膏の出づる所、以て丹木に灌ぐ。丹木は五歳にして、五色乃ち清み、五味乃ち馨る。

黃帝乃ち**崋山**の玉榮を取り、而して之を鍾山の陽に投ず。瑾瑜の玉良を爲し、堅粟にして精密、濁澤有りて光る。五色發し作り、以て柔剛を和す。天地鬼神、是れ食し是れ饗す。君子之を服すれば、以て不祥を禦ふせく。**崋山**自り鍾山に至るまで、四百六十里、其の間盡く澤なり。是に奇鳥・怪獸・奇魚多し、皆な異物なり。

ここでは黃帝が玉の花を鍾山に投げて種を植えたという傳説が記され、「沸沸湯湯」という疊字の形容詞は『淮南

子』時則訓や馬王堆帛書老子乙本卷前古佚書『黃帝四經』兵容にも「萋萋陽陽」という語が見え、有韻の四字句の多さと相俟つて道家・黃老系文獻との關係の深さを思わせるものである。<sup>17)</sup>

又西北四百二十里、曰鍾山、其子曰鼓、其狀如人面而龍身。是與欽鵄殺葆江于昆侖之陽、帝乃戮之鍾山之東曰嶠崖。欽鵄化爲大鶚、其狀如鵬而黑文白首、赤喙而虎爪、其音如晨鶴、見則有大兵。鼓亦化爲駿鳥、其狀如鷓、赤足而直喙、黃文而白首、其音如鶴、見即其邑大旱。

……  
又西三百二十里、曰槐江之山。丘時之水出焉、而北流注于沕水。其中多羸母、其上多青雄黃、多藏琅玕・黃金・玉。其陽多丹粟、其陰多采黃金・銀。實惟帝之平圃、神英招司之、其狀馬身而人面、虎文而鳥翼、徇于四海、其音如榴。南望昆侖、其光熊熊、其氣魂魂。西望大澤、后稷所潛也。其中多玉、其陰多楛木之有若……



又た西北四百二十里を、鍾山と曰う、其の子を鼓と曰い、其の状は人面の如くして龍身。是れ欽磧と葆江を昆侖の陽に殺し、帝乃ち之を鍾山の東の峩崖と曰えるに戮す。欽磧化して大鶚と爲り、其の状は鵬の如くして黒文白首、赤喙にして虎爪、其の音は晨鵠の如く、見るれば則ち大兵有り。鼓も亦た化して駿鳥と爲り、其の状は鴟の如く、赤足にして直喙、黃文にして白首、其の音は鵠の如く、見るれば即ち其邑に大旱あり。

……

又た西三百二十里を、槐江の山と曰う。丘時の水焉より出で、而して北に流れて泐水に注ぐ。其中に羸母多く、其の上に青雄黃多く、多く琅玕・黃金・玉を藏す。其の陽に丹粟多く、其の陰に采黃金・銀多し。實に惟れ帝の平圃、神英招之を司り、其の状は馬身にして人面、虎文にして鳥翼、四海を徇り、其の音は榴の如し。南に昆侖を望み、其の光は熊熊、其の氣は魂魄。西に大澤を望み、后稷の潛る所なり。

詩語「崑崙」の誕生（大野）

其の中に玉多く、其の陰に檜木の若有る多し。……

鍾山には崑崙の南で戦死した神が化した大鶚なる怪鳥が棲むといい、槐江之山の條の「實惟帝之平圃」は郭璞が「玄圃」と注しており、前引の『楚辭』天問や、後に觸れる『楚辭』離騷にも「縣圃」として見えていて、崑崙の中にある山であることをうかがわせる。ここから望む崑崙の神々しい様子が、「熊熊」「魂魄」等の疊字の形容詞で描かれる。

西南四百里、曰昆侖之丘、是實惟帝之下都、神陸吾司之。其神狀虎身而九尾、人面而虎爪、是神也、司天之九部及帝之囿時。有獸焉、其狀如羊而四角、名曰土螻、是食人。有鳥焉、其狀如蠶、大如鴛鴦、名曰欽原、蠶鳥獸則死、蠶木則枯。有鳥焉、其名曰鶉鳥、是司帝之百服。有木焉、其狀如棠、黃華赤實、其味如李而無核、名曰沙棠、可以禦水、食之使人不溺。有草焉、名曰黃草、其狀如葵、其味如蔥、食之已勞。河水出焉、而南流注于無達。赤水出焉、而東南流注于汜天之水。洋水出焉、而西南流注于醜塗之水。黑水出焉、而西流

注于大杆。是多怪鳥獸。

西南四百里を、昆侖の丘と曰う、是れ實に惟れ帝の下都、神陸吾之を司る。其の神狀は虎身にして九尾人面にして虎爪、是の神や、天の九部及び帝の囿時を司る。獸有り、其の狀は羊の如くして四角、名を土虬と曰い、是れ人を食う。鳥有り、其の狀は蠶(蜂)の如く、大いさ鴛鴦の如し、名を欽原と曰い、鳥獸を蠶せば則ち死し、木を蠶せば則ち枯る。鳥有り、其の名を鶉鳥と曰い、是れ帝の百服を司る。木有り、其の狀は棠の如く、黃華赤實、其の味は李の如くして核無し、名を沙棠と曰い、以て水を禦ぐべし、之を食えば人をして溺れざらしむ。草有り、名を糞草と曰い、其の狀は葵の如く、其の味は葱の如く、之を食えば勞を已む。河水 焉より出でて、南流して無達に注ぐ。赤水 焉より出でて、東南流して汜天の水に注ぐ。洋水 焉より出でて、西南流して醜塗の水に注ぐ。黒水 焉より出でて、西流して大杆に注ぐ。是れ怪鳥獸多し。

崑崙本體の條は「帝の下都」という記述に始まり、その守

り神と見られる恐ろしい鳥獸が描かれる。ここでの崑崙は上帝が地上に降りる、天と地をつなぐ通路であり、普通の人は容易に近づけない。その一方で、「帝の百服を司る」鳥や、人を溺れなくさせる沙棠、疲れを治す糞草など、樂園を思わせる産物もある。四つの河が流れ出るさまも前引の海内西經や『淮南子』と同様であるが、崑崙自體の山容は描かれない。

西次三經の他の條では周圍から眺めた崑崙の神々しさが描かれたり、黃帝との關連をうかがわせる記述がある。崑崙の丘の條のみはそこに棲む神や靈妙な動植物の姿が詳細に描かれるが、これとて神山そのものよりもそこに存在する靈的な風物や神々の方に關心が注がれているのである。

黃帝が訪れた聖地としての崑崙を、周の穆王が訪れて西王母と會見する物語が描かれるのが『穆天子傳』<sup>18)</sup>である。穆王は西域に足を踏み入れる前に、西方の諸侯の一つ河宗氏柏天の助けを借りて上帝を祀っている。上帝に成り代わった河宗の口から、崑崙の丘に至れば福祿を授けようと穆王に告げられ、それに従って穆王は崑崙山系の山々を經巡

る。その途中の崑崙之丘と春山についての描寫を見ると、

吉日辛酉、天子升于崑崙之丘、以觀黃帝之宮而封豐隆之葬<sup>①</sup>、以詔後世。癸亥、天子具饗齊牲全、以禮□崑崙之丘。甲子、天子北征、舍于珠澤、以釣于流水。曰「珠澤之藪方三十里。」爰有藿・葦・莞・蒲・茅・苳・兼・蕞。……天子□崑崙以守黃帝之宮、南司赤水而北守春山之寶。天子乃賜<sup>②</sup>□之人□吾黃金之環三五、朱帶・貝飾三十、工布之四。□吾乃膜拜而受。天子又與之黃牛二六、以三十□人于崑崙丘。季夏丁卯、天子北升于春山之上、以望四野、曰、「春山、是唯天下之高山也。」孳木□華<sup>③</sup>不畏雪、天子於是取孳木華之實、曰、「春山之澤、清水出泉、溫和無風、飛鳥百獸之所飲食、先王所謂縣圃。」天子於是得玉策枝斯之英、曰、春山、百獸之所聚也、飛鳥之所棲也。爰有□獸、食虎豹如麋而載骨、盤□始如麇、小頭大鼻。爰有赤豹白虎、熊羆豺狼、野馬野牛、山羊野豕。爰有白鶡青雕、執犬羊、食豕鹿。

吉日辛酉、天子 崑崙の丘に升り、以て黃帝の宮を

詩語「崑崙」の誕生（大野）

觀て豐隆の葬を封じ、以て後世に詔す。癸亥、天子 饗齊（潔齋）せる牲全を具え、以て崑崙の丘に禮□す。甲子、天子 北征し、珠澤に舍り、以て流水に釣る。曰く「珠澤の藪は方三十里」と。爰に藿・葦・莞・蒲・茅・苳・兼・蕞有り。天子 崑崙に□して以て黃帝の宮を守り、南のかた赤水を司りて北のかた春山の寶を守らしむ。天子 乃ち□の人□吾に黃金の環三五、朱帶・貝飾三十、工布の四を賜う。□吾 乃ち膜拜して受く。天子 又た之黃牛二六を與え、三十□人を以て崑崙丘に于かしむ。季夏丁卯、天子 北のかた春山の上に升り、以て四野を望み、曰く、「春山、是れ唯れ天下の高山なり」と。孳木□華は雪を畏れず、天子 是に於て孳木華の實を取り、曰く、「春山の澤、清水 泉を出だし、溫和無風、飛鳥百獸の飲食する所、先王の所謂る縣圃なり」と。天子 是に於て玉策枝斯の英を得て、曰く、「春山、百獸の聚まる所なり、飛鳥の棲む所なり」と。爰に□獸有り、虎豹を食すること麋の如くして骨を載せ、□始を盤<sup>めぐ</sup>ること？麇の如く、

小頭にして大鼻。爰に赤豹白虎、熊羆豺狼、野馬野牛、山羊野豕有り。爰に白鶡青雉有り、犬羊を執り、豕鹿を食らう。(卷二)

穆王は崑崙之丘で「黃帝之宮」に參詣してから犠牲を捧げて祀り、次いで訪れた珠澤は産する物が「爰有……」と列擧される。この形式は『山海經』海經の樂園の描寫にも見られるものである。<sup>23</sup>續いて訪れた春山は『山海經』西次三經にも見える鍾山のことと考えられている。多くの鳥や獸が住まう樂園的風景が描かれ、これこそ『楚辭』にも見えていた崑崙の縣圃であると言っている。

ここでの崑崙は黃帝の聖地としての性格を持つ一方、穆王もまた上帝のお告げを得て靈性を身につけたことによつて、崑崙を訪れることが可能になっている。さらに多くの動植物を羅列してその豊饒さを醸し出す鋪陳表現も見られる。ここでも崑崙そのものよりもそこに産する豊饒な動植物や、雪を畏れない「萃木華」、玉策枝斯の英といった靈妙な風物によつてその樂園性を強調することに主眼があるといえる。

『山海經』西次三經や『穆天子傳』のこうした描寫は前節の海内西經や『淮南子』と同様に、不死を象徴するような靈妙な風物を列擧することによつてその靈的なイメージを表現しようとしているのであり、のちの辭賦につながる鋪陳の技法も見られることは注意に値する。

## 二 象徴としての崑崙

### (一) 荒遠の地名としての崑崙

これまで見てきた文獻は、すべて巫祝や神仙家とのかかわりが深いものであったが、それ以外の文獻の中の崑崙には、その一部のイメージだけを象徴する役割を負っているものもある。

まず崑崙を特別な山ではなく荒遠の地名として記すものがある。『爾雅』釋地を見ると、

東方之美者、有醫無閭之珣玕琪焉。東南之美者、有會稽之竹箭焉。南方之美者、有梁山之犀象焉。西南之美者、有華山之金石焉。西方之美者、有霍山之多珠玉焉。西北之美者、有崑崙虛之璆琳琅玕焉。北方之美者、

有幽都之筋角焉。東北之美者、有斥山之文皮焉。中有岱嶽、與其五穀魚鹽生焉。

東方の美なる者は、醫無閭の珣珥琪有り。東南の美なる者は、會稽の竹箭有り。南方の美なる者は、梁山の犀象有り。西南の美なる者は、華山の金石有り。西方の美なる者は、霍山の多珠玉有り。西北の美なる者は、崑崙虚の璆琳・琅玕有り。北方の美なる者は、幽都の筋角有り。東北の美なる者は、斥山の文皮有り。中には岱嶽有り、其の五穀と魚鹽と生ず。

中國の八方の特産品を擧げている記述の中で、崑崙虚を「西北の美なる者」たる璆琳・琅玕の産地として擧げている。他には會稽や梁山・華山・岱嶽など實在の地名もあり、崑崙虚もその延長上で捉えられていることがわかる。

また『尙書』禹貢には

織皮崑崙・析支・渠搜、西戎卽紂。

織皮は崑崙・析支・渠搜の、西戎卽しんがき紂う（ことによつて貢ぐ）

とあり、西方の國の一つとして記される。殷の伊尹が湯王

詩語「崑崙」の誕生（大野）

の命を受けて作成した、四方の諸侯に貢物を出させる號令である『逸周書』王會解引「伊尹四方令」も

伊尹受命、於是爲四方令曰、「臣請、……正西崑崙・狗國・鬼親……、請令以丹青・白旄……神龜爲獻。」

伊尹 命を受け、是に於て四方令を爲して曰く、「臣請う、……正西の崑崙・狗國・鬼親……、請う令するに丹青・白旄……神龜を以つて獻と爲せと。」

と云い、崑崙はやはり西方の國の名である。

『呂氏春秋』本味には

水之美者、三危之露、崑崙之井。沮江之丘、名曰搖水。曰山之水。高泉之山、其上有涌泉焉。冀州之原。

水の美なる者は、三危の露、崑崙の井あり。沮江の丘は、名づけて搖水と曰う。曰山の水あり。高泉の山は、其の上に涌泉有り。冀州の原あり。

と云い、崑崙が名水を産する場所であることはわかるが、特に靈妙な場所として書かれているわけではない。

これらはいずれもその場所から産出する珍しい物を記す

記事であるから、崑崙自體の様子は不必要な情報であつて記されないのは當然ではあるが、特に『爾雅』「禹貢」のような儒家の文獻では、靈的なイメージを排した合理化が顯著であるともいえよう。『爾雅』釋丘には

丘一成爲敦丘。再成爲陶丘。再成銳上爲融丘。三成爲崑崙丘。

丘の一<sup>ひと</sup>えに成<sup>か</sup>なれるを敦丘と爲す。再<sup>ふたえ</sup>に成<sup>か</sup>なれるを陶丘と爲す。再<sup>み</sup>に成<sup>か</sup>なりて銳き上なるを融丘と爲す。

三<sup>み</sup>えに成<sup>か</sup>なれるを崑崙丘と爲す。

と云い、釋水には

河出崑崙虛、色白。

河は崑崙虛より出で、色白し。

と、『山海經』海内西經と同様に崑崙の姿を説明する記述もあるが、その内容は地理的情報にとどまり、釋地と同様にその靈妙さは一切記されないのである。

(二) 道を得た者の聖地

『莊子』にはしばしば黃帝とともに崑崙が現れ、道を得

た者の聖地としてその名が記される。大宗師篇には

夫道、有情有信無爲無形。……堪坏得之、以襲崑崙。馮夷得之、以游大川。肩吾得之、以處大山。黃帝得之、以登雲天。顓頊得之、以處玄宮。禹強得之、立乎北極。西王母得之、坐乎少廣。

夫れ道は、情有<sup>あ</sup>り信有<sup>あ</sup>り爲<sup>な</sup>す無<sup>く</sup>形無<sup>し</sup>。……堪<sup>たん</sup>坏<sup>ぱい</sup>之<sup>を</sup>得<sup>て</sup>、以<sup>つ</sup>て崑崙<sup>に</sup>襲<sup>い</sup>る。馮夷<sup>を</sup>得<sup>て</sup>、以<sup>つ</sup>て大川<sup>に</sup>游<sup>ぶ</sup>。肩吾<sup>を</sup>得<sup>て</sup>、以<sup>つ</sup>て大山<sup>に</sup>處<sup>る</sup>。

黃帝<sup>を</sup>得<sup>て</sup>、以<sup>つ</sup>て雲天<sup>に</sup>登<sup>る</sup>。顓頊<sup>を</sup>得<sup>て</sup>、以<sup>つ</sup>て玄宮<sup>に</sup>處<sup>る</sup>。禹強<sup>(北方の神)</sup><sup>を</sup>得<sup>て</sup>、北極<sup>に</sup>立<sup>つ</sup>。西王母<sup>を</sup>得<sup>て</sup>、少廣<sup>に</sup>坐<sup>す</sup>。

と云い、崑崙は堪坏が道を得て行くことのできた場所として見えている。

また天地篇には

黃帝遊乎赤水之北、登乎崑崙之丘而南望、還歸、遺其玄珠。使知索之而不得、使離朱索之而不得、使喫詬索之而不得也。乃使象罔、象罔得之。黃帝曰「異哉、象罔乃可以得之乎。」

黄帝 赤水の北に遊び、崑崙の丘に登って南望し、還歸せんとして、其の玄珠（智慧の黒い珠）を遺う。

知をして之を求めしめて得ず、離朱をして之を求めしめて得ず、喫詬くわくごをして之を求めしめて得ず。乃ち象罔にせしめ、象罔之を得たり。黄帝曰く「異なる哉、象罔 乃ち以つて之を得べきか。」と。

至樂篇には

崑崙之虚、黄帝之所休。

崑崙の虚は、黄帝の休じう所なり。

知北遊篇には

無始曰「有問道而應之者、不知道也。雖問道者、亦未問道。道無問、問無應。無問問之、是問窮也。無應應之、是無内也。以無内待問窮、若是者、外不觀乎宇宙、内不知乎大初。是以不過乎崑崙、不游乎太虚。」

無始曰く「道を問う有りて之に應おこうる者は、道を知らざるなり。道を問う者と雖も、亦た未だ道を聞かず。道は問う無く、問うも應うる無し。問う無きに之を問うは、是れ窮（空）を問うなり。應うる無きに之に應

詩語「崑崙」の誕生（大野）

うるは、是れ内（内實）無きなり。内無きを以て窮を問うを待つ（むなしい問に答えようとす）、是くの若き者は、外に宇宙を觀ず、内に大初を知らず。是を以て崑崙に過よらず、太虚に遊ばず」と。

と云う如く、道を得たものだけが行ける場所として崑崙の名が見える。崑崙が黄帝と關係する樂園的な場所であることは示唆されるが、崑崙自體の描寫は記されない。ちなみに逍遙遊篇には神人が住む仙境として藐姑射の山が見えるが、

藐姑射之山、有神人居焉、膚若冰雪、淖約若處子。

不食五穀、吸風飲露。乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外、其神凝使物不疵癘而年穀熟。

藐姑射の山に、神人有りて居り、膚は氷雪の若く、淖約たること處子の若し。五穀を食せず、風を吸い露を飲む。雲氣に乗り、飛龍を御し、而して四海の外に遊び、其の神凝れば物をして疵癘（そこなう）せしめず年穀をして熟せしむ。

と云うように、藐姑射自體の山容は描かれず、神人の姿の

みを詳しく描くのは崑崙の描寫と同じである。神山そのものよりも神人の方に關心の中心があるのであって、神仙的な人物の存在こそが神仙世界の聖地のシンボルであった。

(三) 遊行の目的地

『穆天子傳』は周の穆王が西域を遊行して崑崙をめざす物語であった。このように天下を廣く經巡ることは、古代にあつてはもとより常人のなせる業ではなく、特殊な屬性を持った人物のみに許されることであつた。その一つが王者であり、舜に始まり秦の始皇帝や漢の武帝が行つた巡狩や、禹の治水が代表的なものである。

もう一つは靈性を具えた人物による神話的世界の遊行であり、『楚辭』離騷や九章に描かれる主人公の遊行が代表的である。崑崙はその目的地や經由地として『楚辭』に頻繁に登場する。

まず離騷を見ると、舜帝が祀られる蒼梧を出發し、崑崙の縣圃から天上へ遊行しようとする場面に

朝發軔於蒼梧兮、夕餘至乎縣圃。欲少留此靈瑣兮、

日忽忽其將暮。吾令羲和弭節兮、望崦嵫而勿迫。路曼曼其修遠兮、吾將上下而求索。(王逸注) 縣圃、神山。在崑崙之上。

朝に軔とめを蒼梧に發し、夕に餘は縣圃に至る。少く此の靈瑣(靈妙な場所)に留らんと欲するも、日は忽忽として其れ將まさに暮れんとす。吾は羲和(太陽の馭者)をして節を弭とどめしめ、崦嵫(太陽の沈むところにある山)を望みて迫る勿からしめん。路は曼曼として其れ修ながく遠く、吾は將に上下して求索せんとす。(王逸注) 縣圃とは、神山なり。崑崙の上に在り。

と云う。縣圃は「靈瑣」という語でその靈性が示されるが、それ以上の詳しい様子は描かれない。その後天宮に入ることとを拒絶され地上に戻ってから、再び理解者を求めて地の隅々を遊行する場面で

遭吾道夫崑崙兮、路修遠以周流。

遭りて吾夫かの崑崙に道すれば、路は修く遠く以つて周流す。

と云い、遊行の目的地として崑崙が示されるが、そこまで



の道は「路修遠以周流」「路修遠以多艱兮」「路不周以左轉兮」と長く困難な様子が描かれる。しかし崑崙そのものの様子はやはり描かれず、『穆天子傳』のような樂園的な風物も描かれない。

一方、九歌・河伯は黄河の神の河伯が崑崙へ遊行する内容であり、

與女游兮九河、衝風起兮橫波。乘水車兮荷蓋、駕兩龍兮驂螭。登崑崙兮四望、心飛揚兮浩蕩。日將暮兮悵忘歸、惟極浦兮寤懷。

女なんじと九河あそに游べば、衝風起こりて波を横たう。水車すいしやに乗りて荷蓋し、兩龍を駕して螭てうしやを驂せんとす。崑崙に登りて四もに望めば、心は飛揚して浩蕩す。日は將に暮れんとし悵として歸るを忘れ、極浦ごくぼを惟ただいて寤懷す。

と云う。また九章・涉江にも

世溷濁而莫余知兮、吾方高馳而不顧。駕青虬兮驂白螭、吾與重華遊兮瑤之圃。登崑崙兮食玉英、與天地兮同壽、與日月兮同光。

詩語「崑崙」の誕生（大野）

世は溷濁して余を知る莫し、吾は方まさに高馳して顧みず。青虬を駕して白螭を驂とし、吾は重華と瑤の圃に遊ばん。崑崙に登りて玉英を食らい、天地と壽を同じくし、日月と光を同じくせん。

と云う。遊行の行先として崑崙が登場し、崑崙そのものの山容は描かれないものの、いづれも前後に「心飛揚兮浩蕩」「悵忘歸」「食玉英」「與天地兮同壽、與日月兮同光」といった、安樂や長生を得られる樂園的な性格を暗示する描寫が見られる。特に「食玉英」は前引の『穆天子傳』巻二にも「得玉策枝斯之英」として見えており、「天地と壽を同じく」できる食物と考えられる。

同・悲回風も「兔結」した心を抱いて遊行する場面に、馮崑崙以瞰霧兮、隱蛟山以清江。憚涌湍之礚礚兮、聽波聲之洶洶。紛容容之無經兮、罔芒芒之無紀。軋洋洋之無從兮、馳委移之焉止。

崑崙に馮りて以て霧を瞰み、蛟み（岷）山よに隠りて以て江を清すます。涌湍の礚礚（礚礚）たるに憚おどろき、波聲の洶洶たるを聴く。紛として容容として之れ經無く、

罔として芒芒として之れ紀無し。軋りて洋洋として之れ從る無く、馳せて委移として之れ焉いずくにか止まらん。

と云い、崑崙はやはり遊行の經由地としてその情景は描かれないが、その後には續くのは樂園的な描寫ではなく、波音高く逆巻く激流の果てしなく流れるさまが悲哀を一層強調している。

このように天界への入り口として、また周流する目的地や經由地として登場する崑崙は、それ自體の姿が全く描かれない點で共通する。少なくともこれらの歌を享受する人々の間では、その名を擧げるだけで、『莊子』や『山海經』西次三經、『穆天子傳』に描かれる、有道者であつて初めて訪れることのできる聖地のイメージを共有できたのであろう。

右に例示した諸作品における崑崙は、主人公が安樂や長生を得べくそこを目指すのであるが、長く困難な道のりを經てたどり着いても、主人公は結局救われずに終わる。崑崙はその靈的な雰圍氣によって、理想を實現できない悲哀

を増幅させるアイテムとして用いられていたものであり、中に入れば永遠の安樂を得られるが、そのためには危険を冒さなければならぬという二律背反のイメージのうち、後者の危険性の方が強調されて前者の安樂さが消失したものと見えよう。<sup>24</sup>これに對して『穆天子傳』では、主人公の穆王は西王母と會見して地上を治める權威を得ることに成功しており、そのため前者の安樂さの方が強調されているのであろう。

ところで同じ遊行を描く作品でも、宋玉「高唐賦」(『文選』<sup>25</sup>卷十九)は遊行の目的地である高唐臺の情景が表現豊かに描寫される。いま例を擧げると、

水澹澹而盤紆兮、洪波淫淫之溶溶。奔揚踊而相擊兮、雲興聲之霏霏。猛獸驚而跳駭兮、妄奔走而馳邁。虎豹豺兕、失氣恐喙。雕鶚鷹鷂、飛揚伏鼠、股戰脅息、安敢妄擊。

水は澹澹として盤紆し、洪波は淫淫として溶溶たり。奔りて揚踊して相い撃ち、雲のごとく興る聲の霏霏たり。猛獸も驚きて跳駭し、妄りに奔走して馳邁す。虎

豹豺兕も、氣を失いて恐れ喙まる。雕鶚鷹鷂も、飛揚し伏竄し、股は戦き脅は息い、安んぞ敢えて妄りに撃らん。

ここでは水の流れの激しさを視覚・聴覚の両面から描き出し、さらに猛獸や猛禽も恐れおののくさまを描くことによつて、高唐臺への道中の險しさを浮び上がらせている。

仰視山顛、肅何千千、炫燿虹蜺。俯視嵒嶭、窅窅窈冥。不見其底、虛聞松聲。傾岸洋洋、立而熊經。久而不去、足盡汗出。悠悠忽忽、惴惴自失。使人心動、無故自恐。賁育之斷、不能爲勇。

山顛を仰視すれば、肅として何ぞ千千たる、炫燿たる虹蜺あり。嵒嶭を俯視すれば、窅窅たり窈冥たり。其の底を見ず、虚しく松聲を聞く。傾岸は洋洋として、立つこと熊のごとくして經す。久しくして去らず、足は盡く汗出づ。悠悠たり忽忽たり、惴惴して自ら失う。人心をして動かしめ、故無く自ら恐る。賁育の斷も、勇を爲す能わず。

高唐臺の山顛のそびえ立つさまと谷の深さ暗さを描き、孟

詩語「崑崙」の誕生（大野）

賁・夏育のような勇者でさえ怖氣づく險しい道が迫眞の表現で描寫される。

こうした描寫は『山海經』や『穆天子傳』などに比べると、一層修飾が豊かになっているのは一目瞭然である。そもそも「高唐賦」は宋玉が楚の襄王に對して高唐臺の有り様を賦にして語つたという内容であるから、説明的な語り口になるのは當然ではあるが、宋玉に至つて聖地そのものの風景を鋪陳を驅使して描く表現が成立したことは、一つの轉換點とすべきであろう。

### 三 崑崙の展開

(一) 願望の満たされない理想郷

『楚辭』には遊行の目的地としての崑崙がしばしば歌われていたが、漢代の『楚辭』後期作品にも崑崙への遊行が描かれ、その描寫も細やかになる傾向がある。

たとえば賈誼「惜誓」は

惜余年老而日衰兮、歲忽忽而不反。登蒼天而高舉兮、歷衆山而日遠。觀江河之紆曲兮、離四海之霑濡。攀北

極而一息兮、吸沆瀣以充虛。

余の年老いて日び衰え、歳の忽忽として反らざるを惜しむ。蒼天に登りて高く擧がり、衆山を歴て日び遠ざかる。江河を觀れば之れ紆曲し、四海に離りては之れ霑濡す。北極に攀じて一たび息い、沆瀣（清和の氣）を吸いて以て虚を充たす。

年老いて返らない時間を惜しみ、主人公は蒼天へ高く擧がり遊行を始める。「吸沆瀣以充虚」は『楚辭』遠遊にも「餐六氣而飲沆瀣兮、漱正陽而含朝霞。（六氣を餐らいて沆瀣を飲み、正陽に漱ぎて朝霞を含む。）」と云い、神仙術の影響がうかがえる表現である。續いて

飛朱鳥使先驅兮、駕太一之象輿。蒼龍蚺蚪於左驂兮、白虎騁而爲右駢。建日月以爲蓋兮、載玉女於後車。馳驚於杳冥之中兮、休息崑崙之墟。樂窮極而不厭兮、願從容庠神明。涉丹水而駝騁兮、右大夏之遺風。

朱鳥を飛ばして先驅せしめ、太一の象輿を駕す。蒼龍は蚺蚪として左驂し、白虎は騁せて右駢と爲る。日月を建てて以て蓋と爲し、玉女を後車に載す。杳冥の

中に馳驚し、崑崙の墟に休息す。樂しみ窮極して厭かず、願わくは神明に従容たらん。丹水を涉りて駝騁し、大夏の遺風を右にす。

と云い、この後で「やはり故郷がよい」と言つて遊仙をやめ、楚國で佞臣がはびこるさまを嘆く。主人公は太一神を象つた輿に乗り、朱鳥を先驅けにし、蒼龍や白虎を従えて玉女を載せるなど、幻想的な遊行の雰圍氣は『楚辭』離騷や九章よりも一層華やかになっているが、崑崙そのものの情景に無關心であるのは離騷や九章と同様である。

また嚴忌「哀時命」は

願至崑崙之懸圃兮、采鍾山之玉英。擘瑤木之檀枝兮、望閭風之板桐。弱水汨其爲難兮、路中斷而不通。勢不能凌波以徑度兮、又無羽翼而高翔。

願わくは崑崙の懸圃に至り、鍾山の玉英を采らん。瑤木の檀枝を擘り、閭風の板桐を望む。弱水は汨として其れ難みを爲し、路は中斷して通ぜず。勢は波を凌ぎて以て徑ちに度る能わず、又た羽翼にして高翔する無し。

と云い、仕官の道を小人にふさがれていることを憂えて遊仙を願うが、それも叶わず進退窮まるることが述べられる。ここでは懸圃・玉英・瑤木といった崑崙の靈妙な風物が描かれ、そこに至るまでの困難な道中も描かれるが、崑崙自體の山容にはやはり無關心である。

こうした『楚辭』後期作品の崑崙への遊行は、悲哀を伴うものであつて、天地の果てまで遊行しても決して願望は満たされないことを述べるのが特徴であり、やはり漢代初期の作とする説が有力な『楚辭』遠遊のイメージを引き継ぐものである。これらの崑崙もまた背後にある神話的異景を想起させるような地名アイテムとしてのみ登場し、崑崙自體の山容は記されない。

『楚辭』後期作品以外でも、司馬相如「大人賦」<sup>27</sup>は大人（眞仙）が崑崙へ遠遊して西王母と會見する物語を描いている。

歷唐堯於崇山兮、過虞舜於九疑。紛湛湛其差錯兮、  
雜溼膠輻以方馳。……徧覽八紘而觀四海兮、竭度九江  
越五河。經營炎火而浮弱水兮、杭絕浮渚涉流沙。奄息

詩語「崑崙」の誕生（大野）

蔥極汎濫水嫉兮、使靈媧鼓琴而舞馮夷。時若曖曖將混濁兮、召屏翳誅風伯刑雨師。西望崑崙之軋沕荒忽兮、直徑馳乎三危。排閭闔而入帝宮兮、載玉女而與之歸。登閭風而遙集兮、亢鳥騰而壹止。低徊陰山翔以紆曲兮、吾乃今日觀西王母。鬪然白首戴勝而穴處兮、亦幸有三足烏爲之使。必長生若此而不死兮、雖濟萬世不足以喜。……

唐堯を崇山に歴て、虞舜を九疑に過る。紛として湛湛として其れ差錯たり、雜溼膠輻（重なり入り交じるさま）して以つて方に馳す。……徧く八紘を覽て四海を觀、竭りて九江を度り五河を越ゆ。炎火を經營して弱水に浮き、浮渚を杭もて絶り流沙を渉る。蔥極に奄息して水嫉に汎濫し、靈媧をして琴を鼓せしめ馮夷を舞わしむ。時に曖曖として將に混濁せんとするが若く、屏翳を召して風伯を誅し雨師を刑す。西に崑崙の軋沕荒忽たるを望み、直徑に三危に馳す。閭闔を排して帝宮に入り、玉女を載せて之と與に歸る。閭風に登りて遙かに集まり、亢く鳥の騰りて壹たび止まる。陰山

を低徊して翔けて以つて紆曲し、吾乃ち今日西王母を覩る。髙然として白首に勝を戴きて穴處し、亦た幸いに三足の鳥有りて之が爲に使いす。必ず長生すること此くの若くして死せざれば、萬世を濟ると雖も以つて喜ぶに足らず。……

大人は堯が葬られた崇山や、舜が葬られた九嶷山（蒼梧山）、弱水や流沙、崑崙、三危等『山海經』に見える神話世界を周流する。ここでの崑崙もそれ自體は「軋沕荒忽（遠く遙かにぼんやりとしている）」と云うだけで、その背後の物語を想起させる地名としての役割を擔っている。そこに至るまでの道中も邊遠の地名を擧げるだけで、その間に神々を思うままに操る描寫が入ることによって、その遠さと困難さを浮かび上がらせる。そして大人は穴居して三足の鳥を侍らせる西王母を見て「こんな有様で長生きして死なないのなら、萬世を生きたとて喜べるものではない」と歌っており、遠遊しても幸福な結末が來ないことを暗示する。その後大人は地上に戻るが、果たしてあらゆる歡樂が消え失せ、孤獨の淵に沈んでいくのである。「悲哀を伴う遠遊」

のパターンを踏襲するものであるが、「大人賦」では神仙の道にのめり込む武帝に對する諷諫の意味も込められている。<sup>②</sup>

後漢に至つても、遊行の行き先としての崑崙をうたう作品は引き續き作られた。張衡「思玄賦」<sup>③</sup>は「楚辭」後期作品の流れをくむ言志の賦で、扶桑や崑崙への遊行が描かれる。

留瀛洲而采芝兮、聊且以乎長生。馮歸雲而遐逝兮、夕余宿乎扶桑。喻青岑之玉醴兮、餐沆瀣以爲糧。發昔夢於木禾兮、穀崑崙之高岡。

瀛洲に留まりて芝を采り、聊且いささか以て長生す。歸雲に馮りて遐よそく逝き、夕に余は扶桑に宿る。青岑の玉醴を喻ゆみ、沆瀣を餐らいて以て糧と爲す。昔夢を木禾に發し、崑崙高岡に穀はえたり。

「瀆沆瀣」など「遠遊」「惜誓」の表現を借りながら崑崙のような仙界で養生する願望を述べるが、それは結局願望で終わり、叶えられることはない。ここでの崑崙は『楚辭』後期作品と同様の「願望の満たされない理想郷」であ

り、その情景を描くことには無關心であるのも同じである。しかもその末尾では

苟中情之端直兮、莫吾知而不惡。墨無爲以凝志兮、與仁義乎消搖。不出戸而知天下兮、何必歷遠以劬勞。

苟し中情の端直なれば、吾を知るもの莫くとも惡じず。墨（黙）して無爲にして以て凝志し、仁義と消搖（逍遙）せん。戸を出でずして天下を知れば、何ぞ必ずしも遠きを歴て以て劬勞せん。

と、無爲の道に勉めて心を凝らし、「戸を出でずして天下を知」る境地に至れば遠遊など必要ないとまで云う。遠遊を描きながらそれを自己否定することにより、悲哀を伴う遊行の行き先としての崑崙の展開には一旦終止符が打たれたのである。

## （二）天子を祝頌する神山

一方、武帝以後の辭賦には「願望の満たされない理想郷」から變容した崑崙も描かれている。

武帝が採った對外擴張政策によって漢の版圖が廣がると、

詩語「崑崙」の誕生（大野）

それまで傳説や古書の記述からの想像の上でしか知られていなかった邊遠の地域が現實のものとなつていき、武帝自らも新たな版圖となつた土地に神話的イメージを持つ地名を當てて、それを現實化していった。たとえば南越を滅ぼした後の地に蒼梧郡と名付けたのもその一例で、蒼梧はもともと楚の國の南端にある山の名で、舜が葬られた所として『楚辭』や『山海經』などに見えている。<sup>32)</sup>

崑崙についても、西域へ派遣した使者の報告した河源の山に古書を參考にして崑崙と名付けたことが『史記』大宛列傳に記される。

漢使窮河源、河源出于**寘**、其山多玉石、采來。天子案古圖書、名河所出山曰崑崙云。

漢使、河源を窮むるに、河源は于**寘**に出で、其の山は玉石多く、采り來たる。天子、古えの圖書を案じ、河の出ずる所の山に名づけて曰く崑崙と云う。

大宛列傳にはまた張騫が安息國の長老から「西に數千里の條枝國には弱水や西王母があるというが、見たことはない」という話を聞いたことも記される。崑崙に附隨するこ

これらの傳説的地名や人名は、確認は取れなかったとはいえ、安息國の長老も聞き知っていたということである。これは現在の可能性は高まったといえる。

かくして想像の彼方にあつた崑崙やその周辺が、天子の手の届く範囲にまで引き寄せられた。これが後の文學作品にも影響を及ぼすことになる。『楚辭』後期作品では俗世を離れて遊行する場所であつた崑崙が、天子の宮殿や狩場をほめる辭賦作品にも現れるようになるのである。

前漢末の揚雄は自らの賦に崑崙をよく登場させている。成帝の奢侈を諷諫した賦の一つ「甘泉賦」<sup>③</sup>は、成帝が復活させた甘泉宮での祭祀に隨行して作ったもので、甘泉宮の壯麗さを神話世界の地名や人名などをちりばめながら歌う天子を「諷」した作品ではあるが、諷諫の言葉はほとんどない。

於是大夏雲譎波詭、摧噍而成觀。……翠玉樹之青葱兮、壁馬犀之磷璠。金人伉伉其承鍾虞兮、嵌巖巖其龍鱗。揚光曜之燎燭兮、垂景炎之焘焘。配帝居之縣圃兮、象泰壹之威神。……歷倒景而絕飛梁兮、浮蔑蠖而撤天。

左機槍右玄冥兮、前標闕後應門。陰西海與幽都兮、涌體汨以生川。蛟龍連蜷於東厓兮、白虎敦圜崑崙。

……風從從而扶轄兮、鸞鳳紛其御蕤。梁弱水之瀾澹兮、躡不周之透蛇。想西王母欣然而上壽兮、屏玉女而却宓妃。玉女無所眺其清虛兮、慮妃曾不得施其蛾眉。

是に於いて大夏（夏は雲のごとく譎しく波のごとく詭しく、摧噍として（高々と）觀を成す。……玉樹の青葱たるを翠にし、馬犀の磷璠たる（まだらに輝く）を壁にす。金人は伉伉として（勇ましく）其れ鍾虞を承け、嵌なること巖巖として其れ龍鱗のごとし。光曜の燎燭を揚げ、景炎の焘焘たるを垂る（勢いよく吹き出す）。帝居の縣圃に配し、泰壹の威神に象る。……倒景を歴て飛梁を絶ち、蔑蠖（ちり）を浮かべて天を撤う。機槍（星の名）を左にし玄冥（北方の水神）を右にし、標闕（赤い城門）を前にし應門を後にす。西海と幽都を陰にし、涌體は汨として以て川を生ず。蛟龍は東厓に連蜷として（とぐるを巻き）、白虎は崑崙に敦圜す（ほえる）。



……風は從從（前進するさま）として轄を扶け、鸞鳳は紛として其れ蕤（車内の紐）を御す。弱水の滂濑たる（流れの小さいさま）を梁り、不周の透蛇たる（曲

がりくねったさま）を躡む。西王母を想い欣然として壽を上り、玉女を屏り宓妃を却く。玉女も其の清虚を眺むる所無く、慮（宓）妃も曾ち其の蛾眉を施すを得ず。

甘泉宮という現實の場所に、崑崙山を始め『楚辭』や『山海經』に見える不周の山や西海・幽都など遠方の神話的な場所が立ち現れ、さらに西王母や玉女・宓妃も現われ、物理的な空間をあつさり超越した世界が現出する。『穆天子傳』での周の穆王は自ら西王母の住む土地へ出かけていったのであるが、武帝は神話世界の地名を現實化していった結果、のちに『漢武故事』『漢武帝内傳』に見られるような、穆王とは逆に西王母が自らを訪ねてくる傳説を生むまでに至った。かくて武帝本人はもとより以後の漢帝も、自ら神話的な土地に出かけるのではなく、神話的世界を手元に引き寄せてしまう存在となったのである。

詩語「崑崙」の誕生（大野）

ちなみに歴史上の人物が君主の娛樂の場に立ち現れることと自體は枚乘「七發」（『文選』卷三十四）に既に例があり、たとえば遊宴の場面は

連廊四注、臺城層構、紛紜玄綠。輦道邪交、黃池紆曲。溷章白鷺、孔鳥鸚鵡、鸚鵡鴝鵒、翠鬣紫纓。螭龍德牧、邕邕群鳴。陽魚騰躍、奮翼振鱗。……列坐縱酒、蕩樂娛心。景春佐酒、杜連理音。滋味雜陳、肴糝錯該。練色娛目、流聲悅耳。於是乃發激楚之結風、揚鄭衛之皓樂。使先施徵舒陽文段干吳娃閭媿傳豫之徒、雜裾垂鬢、目窈心與、揄流波、雜杜若、蒙清塵、被蘭澤、嫵服而御。

連廊は四もに注なり、臺城は層ね構え、紛紜として玄く綠なり。輦道は邪めに交わり、黃池は紆曲す。溷章・白鷺、孔鳥・鸚・鵡・鸚鵡・鴝鵒と、翠鬣紫纓あり。螭龍・德牧は、邕邕として群鳴す。陽魚は騰り躍り、翼を奮い鱗を振う。……列坐して酒を縱まにし、樂しみを蕩かし心を娛めます。景春は酒を佐け、杜連は音を理す。滋味は雜り陳なり、肴糝は錯わり該わる。

練色は目を娛しませ、流聲は耳を悦ばす。是に於いて乃ち激楚の結風を發し、鄭衛の皓樂を揚ぐ。先施・徵舒・陽文・段干・吳娃・閭姬・傅豫の徒をして、裾を雜え鬢かみを垂らしめ、目は窈いじみ心は與えしむ。流波を掄ひき、杜若を雜え、清塵を蒙り、蘭澤を被り、嬋服して御す。

と描かれる。『孟子』滕文公下に見える縦横家・景春さながら口達者な者が宴を盛り上げ、古えの琴の名人・杜連（『韓非子』外儲説右下に見える田連か）のような樂人が音樂を奏で、先施（西施）をはじめとする古代の美女もかくやと思われ、倡女たちが流し目で誘惑してくるといった描寫もあり、さらに鸞鷁（鳳凰の一種）や螭龍のような想像上の瑞鳥や瑞獸も見られる。そもそも「七發」は吳客が楚の太子の病氣を治すためにさまざまな快樂を語って聞かせる内容であるから、そこに虚構による誇張があつても何ら不思議はない。

司馬相如「子虚賦」になると楚の子虚の口を借りて楚王の狩獵の壯大さが描かれる。いまその一節を擧げると、

於是乎乃使剽諸之倫、手格此獸。楚王乃駕馴駁之駟、乘彫玉之輿、靡魚須之橈旃、曳明月之珠旗、建干將之雄戟、左烏號之彫弓、右夏服之勁箭。陽子驂乘、嬋阿爲御。案節未舒、即陵狡獸。蹶蛩蛩、躡距虛、軼野馬、轉駒駖、乘遺風、射遊騏。儻肫倩洌、雷動焱至、星流電擊、弓不虛發、中必決皆、洞胸達掖、絕乎心繫、獲若雨獸、擿中蔽地。

是に於てか乃ち剽諸の倫ともがらをして、手もて此の獸を格たしむ。楚王乃ち馴駁の駟を駕し、彫玉の輿に乗り、魚須の橈旃を靡かせ、明月の珠旗を曳き、干將の雄戟を建て、烏號の彫弓を左にし、夏服の勁箭を右にす。陽子驂乗し、嬋阿御と爲る。節を案じて（馬の歩みを抑え、未だ舒べざるに、即ち狡獸を陵ぐ。蛩蛩を躡み、距虚を躡み、野馬を軼す、駒駖を轉り、遺風（千里の馬）に乗り、遊騏を射る。儻肫倩洌（速いさま）、雷のごとく動き焱のごとく至り、星のごとく流れ電のごとく撃ち、弓は虚しくは發せず、中れば必ず皆を決り、胸を洞し掖を達し、心繫（心臓の脈）を絶

ち、獲えものは獸を雨ふらすが若く、巾（草）を拵おぼい地を蔽おほう。

と、『史記』刺客列傳に見える吳王僚を暗殺した刺客の專（剽）諸や、傳説の刀匠・干將の名劍、陽子（『史記素隱』引張輯注に伯樂という）や娥阿（郭璞は「古之善御者」といい、『史記集解』引『漢書音義』には月の御者という）といった神話傳説や歴史上の人物、また駮や蝨蝨、駒駟など『山海經』に見える想像上の動物が狩場に立ち現れ、時空を超えた神話的世界が現出する。しかしこれに答えた齊の烏有先生の言葉は

且齊東階鉅海、南有琅邪、觀乎成山、射乎之罘、浮勃澥、游孟諸、邪與肅慎爲隣、右以湯谷爲界。秋田乎青丘、彷徨乎海外、吞若雲夢者八九、其於匈中曾不帶芥。若乃俶儻瑰璋、異方殊類、珍怪鳥獸、萬端鱗峯、充仞其中者、不可勝記、禹不能名、禹不能計。且つ齊の東は鉅おほいなる海を階しきりとし、南に琅邪を有たもち、成山に觀し（樓臺を建て、之罘に射、勃澥（渤海）に浮かび、孟諸（宋の沼澤の名）に遊び、邪なめに肅

詩語「崑崙」の誕生（大野）

慎と隣と爲り、右は湯谷を以て界と爲す。秋は青丘に拵おぼし、海外に彷徨し、雲夢の若き者八九を吞めども、其の匈中に於て曾ち帶芥（とげ）ともせず。若し乃ち俶儻瑰璋（珍しいさま）として、方を異にし類を殊にし、珍怪鳥獸、萬端にして鱗のごとく峯あまり、其の中に充仞せる者は、勝けて記すべからず、禹も名づくる能わず、禹（契）も計かうる能わず。

というもので、日の昇る場所である湯谷など神話上の地名もわずかに見えるものの、殆ど琅邪・成山・之罘など齊の現實の地名でその廣さを示し、珍しい鳥獸の多さもいちいち列擧せず「禹でも名づけきれず殷祖契でも數え切れない」と云うだけで、子虚の長廣舌とは對照的である。司馬相如は恐らく楚地の珍しい神話傳説に彩られた異國情緒を醸し出すために敢えて子虚の言葉にこのような誇張を施したのであって、當時は『楚辭』が中原に傳えられ、都の長安で楚に對するエキゾチシズムが高まつていたこと（※）もその背景にあると考えられる。

ところが「子虚賦」が武帝の目に止まり、司馬相如は武

帝に召し出された。そこで相如は「これは諸侯のことを歌ったもので、まだ見るべきものはないので、天子遊獵の賦を作らせてほしい」と言い、續篇「上林賦」を作った。

「上林賦」での漢帝の狩場は珍しい獲物が列擧され、「七發」と同様の宴席の場面も描かれるが、

於是乎遊戲懈怠、置酒乎顛天之臺、張樂乎膠葛之寓。  
撞千石之鐘、立萬石之虞。建翠華之旗、樹靈鼉之鼓。

奏陶唐氏之舞、聽葛天氏之歌。千人倡、萬人和。山陵爲之震動、川谷爲之蕩波。巴渝宋蔡、淮南干遮、文成顛歌、族居遞奏、金鼓迭起。鏗鎗闐鞀、洞心駭耳。荆吳鄭衛之聲、韶濩武象之樂、陰淫案衍之音、鄢郢續紛、激楚結風。俳優侏儒、狄鞮之倡、所以娛耳目樂心意者、麗靡爛漫於前、靡曼美色於後。若夫青琴慮妃之徒、絕殊離俗、妖冶閑都。靚莊刻飾、便嬾綽約、柔橈嫚嫚、嫵媚纖弱、曳獨繭之楡褱、眇閭易以恤削。……芬芳漚鬱、酷烈淑郁。皓齒粲爛、宜笑的皪。長眉連娟、微睇縣貌。色授魂予、心愉於側。

是に於てか遊戯して懈怠し、酒を顛天之臺に置き、

樂を膠葛の寓(宇)に張る。千石の鐘を撞き、萬石の虞を立つ。翠華の旗を建て、靈鼉の鼓を樹つ。陶唐氏の舞を奏し、葛天氏の歌を聴く。千人倡い、万人和す。

山陵之が爲に震動し、川谷之が爲に波を蕩かす。巴渝宋蔡、淮南の干遮(曲名か)、文成(西遼郡)顛歌

(益州郡滇池縣)あり、族(あつ)まり居て遞(たが)いに奏し、金鼓迭(たが)いに起こる。鏗鎗闐鞀として、心を洞(とお)し耳を駭

かす。荆吳鄭衛の聲、韶濩武象の樂、陰淫案衍(流れるさま)の音、鄢郢は續紛とし、激楚結風あり。俳優侏儒、狄鞮の倡、耳目を娛しませ心意を樂します所以の者は、前に麗靡爛漫として、後ろに靡曼たる美色あり。夫(か)の青琴慮妃の徒の若きは、絶殊にして俗を離れ、妖冶閑都たり。靚莊(化粧が美しい)刻飾(髪が整っている)、便嬾(綽)約(身動きがしなやか)、柔橈(體が細く柔らかい)嫚嫚(可愛くほっそりしている)として、獨繭の楡褱(長く垂れた袖)を曳き、眇として閭易(ゆつたりしている)として以て恤削たり(衣が形良い)。……芬芳は漚鬱として、酷烈淑郁たり。皓

齒は粲爛として、宜笑的磔たり（美しく笑うさま）。長眉は連娟として、微睇は縣藐たり。色授けて魂予え、心は側らに愉しむ。

古代の傳説の歌や舞、四方の民族の歌、古代の美女が、「七發」よりも誇張されて現れる。武帝はもともと楚地のものであった神話世界を現實のものにしようとし、司馬相如の手を借りて自らの手元に引き寄せてしまったのである。

しかし相如はこれらの賦の登場人物を「子虛」<sup>うそ</sup>「烏有」<sup>いすくぞあらん</sup>先生<sup>これなし</sup>「<sup>こ</sup>是公」と、わざわざ虚構であることを明示するような名にしている。現實ではないと断つた上で、遠慮なく時空を超越した世界を生み出したわけであるが、武帝にそれは通じなかつたようだ<sup>⑩</sup>。その後相如は神仙術にのめり込む武帝を「大人賦」で諷諫したが、そこでの崑崙は既述の如く従前通りの「悲哀の理想郷」であった。そして「甘泉賦」に至って、ついに漢の皇帝の空間である甘泉宮そのものまで、もはや現實も虚構も曖昧模糊となつて、崑崙にまで至る廣大な神話的空間を取り込んでしまう。揚雄賦においては、賦を語る側がそれを虚構と断ることもなく、

成帝に神話を現實化できる靈力を與えているのである。「甘泉賦」に續く「羽獵賦」も成帝の田獵の贅澤さを暗に諷めたもので、神話世界と現實がない交ぜになつて狩獵のさまが描寫される。

賁育之倫、蒙盾負羽、杖鏖邪而羅者以萬計。其餘荷垂天之罽、張竟壑之罟。靡日月之朱竿、曳彗星之飛旗。青雲爲紛、紅蜺爲纒。屬之虜崑崙之虛。

賁育の倫は、盾を蒙り羽（矢）を負い、鏖邪（莫邪の劍）を杖にして羅なる者は萬を以て計う。其餘は垂天之罽を荷い、竟壑の罟（野を包み込む鹿網）を張る。日月の朱竿を靡かせ、彗星の飛旗を曳く。青雲を紛（旗の垂れ）と爲し、紅蜺を纒と爲す。之を崑崙の虚に屬ぬ。

ここでも現實の狩りの場に、昔の勇猛の士や莫邪の名劍を保持した兵士が入り込み、それが崑崙山まで連なるという、時空を超越した世界が作り出されている。さらに

乃使文身之技、水格鱗蟲。凌堅氷、犯嚴淵、探巖排碕、薄索蛟螭。蹈獺獺、據鼃鼃、祛靈螭。入洞穴、出

蒼梧。乘鉅鱗、騎京魚。浮彭蠡、目有虞。方椎夜光之流離、剖明月之珠胎、鞭洛水之處妃、餉屈原與彭胥。

乃ち文身（入れ墨をした泳ぎの名人）の技をして、水に鱗蟲を格たしむ。堅水を凌ぎ、嚴淵を犯し、巖を探り碇を排い、蛟螭を薄め索む。獼猴を踏み、鼈鼉に據り、靈蠭（大龜）を扶る。洞穴に入り、蒼梧に出ず。

鉅鱗に乗り、京（鯨）魚に騎る。彭蠡に浮かび、有虞（舜の墓所）を目にす。方に夜光の流離（瑠璃）を椎き、明月の珠胎を剖き、洛水の處妃を鞭うち、屈原と彭胥に餉す。

の如く、楚の南端の蒼梧山まで續く洞穴をくぐり、洛神宓妃を鞭打つて却け、屈原と殷の大夫で江に流された傳説のある彭咸、また遺體を長江に捨てられた伍子胥に供え物を捧げるといふ『楚辭』さながらの幻想的な遊行も展開する。揚雄は『漢書』本傳に「又た屈原の文の相如に過ぐるも容れられず、離騷を作り、自ら江に投じて死するに至るを怪しみ、その文を悲しみ、これを讀みて未だ嘗て涕を流さざるはなきなり。」と云うほど『楚辭』に心酔しており、さ

らに「反離騷」を作つてこれを岷山から長江に投じて屈原を弔つたといふ<sup>43</sup>。その揚雄の賦が『楚辭』の發想を借りたことには何らの不思議もないが、君主に容れられぬ不平と憂國の情をそこから捨象した上で、理想郷を目指す遊行だけ天子を稱える場に持ち込んだのは揚雄の新しさといえる。

揚雄のもう一つ作品「長楊賦」では、漢の高祖が天下を統一した偉業を稱えるのに、東の大海と對にして西の崑崙を國土の果てとして擧げている。

於是上帝眷顧高祖、高祖奉命、順斗極、運天關。橫鉅海、票昆侖。提劍而叱之、所麾城擗邑、下將降旗。

一日之戰、不可殫記。

是に於いて上帝は高祖を眷顧し、高祖は命を奉じ、斗極に順い、天關を運らす。鉅海を横ぎり、昆侖に票う。劍を提げて之を叱し、城を麾かせ邑を擗る所は、將を下し旗を降ろす。一日の戰、殫くは記すべからず。

高祖が天命を奉じ、東は巨大な東海を渡つて、西は崑崙の

あたりまでさまよい、劍をひっさげ脅しつけ、城や町を打ち破つて敵將を降伏させたと歌う。現實の高祖は無論これほど廣範圍に移動はしていないが、天子の勢力の及ぶ觀念的な範圍の端として崑崙が認識されるようになったのである。

後漢に至つても班固「西都賦」(『文選』卷一)に

東郊則有通溝大漕、潰渭洞河。汎舟山東、控引淮河、與海通波。西郊則有上囿禁苑、林麓藪澤、陂池連乎蜀漢。繚以周墻、四百餘里。離宮別館、三十六所。神池靈沼、往往而在。其中乃有九真之麟、大宛之馬、黃支之犀、條支之鳥。踰崑崙、越巨海、殊方異類、至于三萬里。

東郊は則ち通溝大漕(疎水と運河)有り、渭に潰よ河を洞つらぬく。舟を山東に汎うかべ、淮河を控引し、海と波を通ず。西郊は則ち上囿禁苑、林麓藪澤有り、陂池として蜀漢に連なる。繚めぐらすに周墻を以てすること、四百餘里。離宮別館は、三十六所。神池靈沼は、往往に在り。其の中は乃ち九眞の麟、大宛の馬、黃支の犀、

詩語「崑崙」の誕生(大野)

條支の鳥有り。崑崙を踰え、巨海を越え、殊方の異類は、三萬里より至る。

と云い、東郊の運河が東海にまで通じているのと對にして、西郊の神池や靈沼にいる西域の珍獸が崑崙を越えて來るといふ表現で、天子の威光の及ぶ範圍の廣大さを稱える。

また張衡「西京賦」(『文選』卷二)も

後宮則昭陽飛翔、增成合驪、蘭林披香、鳳皇鴛鸞。……金阨玉階、彤庭輝輝。珊瑚琳碧、璫珉璘彬。珍物羅生、煥若崑崙。雖厥裁之不廣、侈靡踰乎至尊。後宮は則ち昭陽・飛翔、增成・合驪、蘭林・披香、鳳皇・鴛鸞(いずれも宮殿の名)あり。……金の阨玉階、彤の庭は輝輝たり。珊瑚・琳碧、璫珉は璘彬たり(玉の光が文をなす)。珍物は羅生し、煥として崑崙の若し。厥の裁は廣からずと雖も、侈靡は至尊を踰ゆ。

と云い、後宮の贅澤さを西王母の住み玉のあふれる崑崙にたとえて稱える。ここに天子や皇后を祝頌する地名としての崑崙の用法が確立したのである。

(三) 建安詩の崑崙——詩語「崑崙」の誕生

後漢末の建安年間に至つて、ようやく詩にも崑崙を始め

とする神話的地名が登場するようになる。たとえば曹操

「氣出唱」<sup>④</sup>は仙人や仙境とはつきり結びついた崑崙の異景

をうたう。其二を挙げると、

遨游八極

八極を遨游し、

乃到崑崙之山

乃ち到る 崑崙の山の、

西王母側

西王母の側に。

神仙金止玉亭

神仙は金のくるま止まり玉のくる

ま亭まる、

來者爲誰

來たる者は誰と爲す。

赤松王喬

赤松と王喬、

乃德旋之門

乃つ徳・旋のほしと門のほし。

樂共飲食到黃昏

樂しみて共に飲食し黃昏に到る。

多駕合坐

多くの駕は坐を合わせ、

萬歲長 宜子孫

萬歲長えならん 子孫に宜しか

らん。

崑崙山が西王母や赤松子・王子喬らの神仙とともに見え、

ひたすらめたい雰圍氣を醸しながら、最後に長壽と子孫の繁榮を祈る。

同じく「陌上桑」も、

駕虹蜺 乘赤雲

虹蜺を駕し 赤雲に乗り、

登彼九嶷歷玉門

彼の九嶷に登り玉門を歴。

濟天漢 至崑崙

天漢を濟り 崑崙に至り、

見西王母謁東君

西王母に見え東君に謁ゆ。

交赤松 及羨門

赤松及び羨門に交わり、

受要祕道愛精神

祕道を受要し精神を愛す。

食芝英 飲醴泉

芝英を食らい 醴泉を飲み、

拄杖桂枝佩秋蘭

桂枝を拄杖つえきて秋蘭を佩ぶ。

やはり崑崙が赤松子や羨門高ら仙人の名とともに登場する。

「東君」は崑崙で西王母とともに謁見することから、『楚

辭』九歌・東君に見える東方の日神の東君ではなく、西王

母と對になる男神の東王父を指す。東王父は本來は東の扶

桑にいとされるが、<sup>⑤</sup>ここでは西王母とともに崑崙にいる

ものとされている。赤松子は「遠遊」や「惜誓」にも既に

見え、他にも「九嶷」「桂枝」「秋蘭」など『楚辭』に見え



る語を多く用いているが、『楚辭』に見られたような悲哀を伴う遊行の雰圍氣は希薄になっている。

これに比べると曹植の「遠遊篇」はやや趣が異なる。

遠遊臨四海 遠遊して四海に臨み、

俯仰觀洪波 俯仰して洪波を觀ん。

大魚若曲陵 大魚は曲陵の若く、

承浪相經過 浪を承けて相い經過す。

靈鰲戴方丈 靈鰲方丈を戴き、

神嶽儼嵯峨 神嶽儼として嵯峨たり。

仙人翔其隅 仙人其の隅に翔けり、

玉女戲其阿 玉女其の阿に戯る。

瓊蕊可療飢 瓊蕊飢えを療すべし、

仰漱吸朝霞 仰いで漱ぎ朝霞を吸う。

崑崙本吾宅 崑崙本と吾が宅、

中州非我家 中州我が家に非ず。

將歸謁東父 將に歸りて東父に謁えんとし、

一舉超流沙 一たび舉りて流沙を超ゆ。

鼓翼舞時風 翼を鼓して時なる風に舞い、

長嘯激清歌 長嘯して清歌を激す。

金石固易弊 金石も固より弊れ易し、

日月同光華 日月と光華を同じくせん。

齊年與天地 年を天地と齊しくすれば、

萬乘安足多 萬乘安んぞ多とするに足らん。

長生を象徴する仙人や玉女、瓊蕊や朝霞を竝べた後に「崑崙こそがもともとの我が家」と云つてそこに歸ることをうたう。「東父」は東王父を指し、ここでも西王母とともに崑崙に在るものとされている。

この詩も崑崙の山容そのものは全く描かず、神仙や玉女、芝英や醴泉、各種の玉など仙境を端的に象徴するものを竝べることでその情景を紡ぎ出すのは、漢賦の描寫手法を踏襲し發展させたものであり、『楚辭』遠遊と比べても凝縮された表現で壯大なスケールの遊行を描くことに成功している。とはいえ最後の四句では『楚辭』九章・涉江の「與天地兮同壽、與日月兮同光。」を用いることによって、その前にある「世溷濁而莫余知兮（世は溷濁して余を知るもの莫し）」という句を想起させ、最後の句で「萬乘の天子の

位とて良いものとはいえない」と云うのと相俟つて、理解者のない境遇に置かれた苦惱をにじませている點は曹操の詩と大きく異なる。

揚雄や張衡によつて一旦は捨て去られた、現世への不平から逃れるための遊行の目的地という崑崙のイメージが、曹植によつて詩に移植され蘇つたのであり、「世の溷濁を去ろうとする者が目指す西の果ての仙境」を象徴する詩語としての崑崙はここに始まったといえよう。

#### 結語及び餘論

これまで述べ來つたことをまとめれば、まず『山海經』海内西經・大荒西經では崑崙自體の山容やそこに産出するものが、その周圍にあるものとともにつぶさに描かれ、靈的な雰圍氣を醸し出している。『楚辭』天問に見える崑崙に關する問いも、こうした知識を前提にしたものであつて、巫祝の知識を試すためのものであつたと考えられる。黃帝派道家の影響が濃い『山海經』西次三經や『穆天子傳』も不死を象徴するような靈妙な風物を鋪陳することによつて

その靈的なイメージを表現しようとしているのであり、その辭賦につながるものである。

これに對して『爾雅』『呂氏春秋』など巫祝や神仙家以外に傳えられた書物では、専らそこに産出するもののみが記され、靈的な雰圍氣がそぎ落とされる合理化が施されている。『莊子』の崑崙はこれとは逆に、黃帝とともに現れ、その靈的な雰圍氣のみに注目する書き方である。

こうした知識を傳えるための文獻における崑崙に對し、『楚辭』離騷や九章のような韻文では、崑崙はその靈的な雰圍氣によつて、理想を實現できない悲哀を増幅させる地名アイテムとして用いられていた。崑崙の山容は描かれず、その名を擧げるだけで背後の靈的な雰圍氣を共有できたのである。

漢の武帝に至つて、崑崙は天子の威光の及ぶ範圍に收まつた。さらに楚地の珍しい神話傳説の世界をも、司馬相如の「子虛賦」によつて自らの手元に引き寄せてしまった。そして前漢末の揚雄に至つて、崑崙から悲哀のイメージがそぎ落とされ、天子の宮殿や狩場を神話世界の理想郷に重

ね合わせる用法が加わる。武帝以後の漢帝は神話世界を現出する存在だったのである。

一方で『楚辭』後期作品や司馬相如「大人賦」、張衡「思玄賦」のような、願望の満たされない理想郷としての崑崙の描寫は、その後の辭賦に繼承されることなく消えていった。その要因として一番に挙げなければならぬのは、やはり「現世の溷濁を逃れて神話的世界へ遊行する」という枠組みをもつ楚辭文學そのものがマンネリズムに陥って衰退した<sup>49</sup>ことである。これに加えて神仙思想の流行とともに崑崙山が「努力して到達すべき理想郷」へと變化したことも挙げられよう。これには理想郷としての崑崙の様子<sup>50</sup>が仔細に描かれた、後述する『神異經』『海内十洲記』のような神仙思想を宣揚する書物の登場も大いに關係していることであろう。そして揚雄によって崑崙に天子の疆域の廣大さを祝頌する用法が加えられたことも、また崑崙から悲哀のイメージを消し去る力となったのである。

ところが建安期の曹植に至って、世の溷濁を逃れて遊行する目的地としての、悲哀のこもった崑崙のイメージが、

辭賦ではなく詩において蘇った。かくて現世を逃れて長生を得るための目標とすべき西の果ての仙境として詩に用いられるようになり、詩語としての崑崙がここに誕生したのである。

ところで『楚辭』天問や『山海經』西次三經などに見られた、知識としての崑崙を記す書は、漢以後も引き續き現れている。たとえば

崑崙者、地之中也。

崑崙なる者は、地の中（大地の中心）なり。（『太平御覽』卷三十六引『河圖括地象』）

崑崙墟在西北、去嵩高五萬里、地之中也。其高萬一千里。河水出其東北陬。

崑崙墟は西北に在り、嵩高を去ること五萬里、地の中なり。其の高さは萬一千里。河水其の東北の陬<sup>すゐ</sup>より出ず。（『水經』卷一・河水）

の如くであるが、『山海經』と同様に崑崙そのものの山容や性質が記されている。これらはいずれも地理を記した書であるから、知識を説明する内容になるのは當然であるが、

後漢に至つて神仙色の強い小説にも崑崙に關する詳細な記述が現れるようになる。

まず東方朔撰と傳えられる『神異經』には、

崑崙山上有柰、冬生子、碧色、須玉井水洗之方可食也。

崑崙山の上に柰かうなんし有り、冬に子みを生じ、碧色、玉井の水を須もちいて之を洗はえば方はめて食はすべきなり。

と云い、同じく東方朔撰と題する『海内十洲記』には

崑崙、號曰崑崙、在西海之戌地、北海之亥地、去岸十三萬里。又有弱水週回繞匝。山東南接積石圃、西北接北戸之室。東北臨大活之井、西南至承淵之谷。此四角大山、實崑崙之支輔也。積石圃南頭、是王母告周穆王云「咸陽去此四十六萬里、山高、平地三萬六千里。上有三角、方廣萬里、形似偃盆、下狹上廣、故名曰崑崙。山三角、其一角正北、干辰之輝、名曰閩風巔。其一角正西、名曰玄圃堂。其一角正東、名曰崑崙宮。其一角有積金、爲天墉城、面方千里。城上安金臺五所、玉樓十二所。其北戸山・承淵山、又有墉城。金臺・玉

樓、相鮮如流、精之闕光、碧玉之堂、瓊華之室、紫翠丹房、錦雲燭日、朱霞九光、西王母之所治也、眞官仙靈之所宗。上通璇璣、元氣流布、五常玉衡。理九天而調陰陽、品物群生、稀奇特出、皆在於此。天人濟濟、不可具記。此乃天地之根紐、萬度之綱柄矣。……」

崑崙、號して崑崙と曰い、西海の戌地、北海の亥地に在り、岸を去ること十三萬里。又た弱水の周回繞匝する有り。山の東南は積石圃に接し、西北は北戸の室に接す。東北は大活の井に臨み、西南は承淵の谷に至る。此の四角は大山、寔まことに崑崙の支輔なり。積石圃の南頭は、是れ王母周穆王に告げて云えらく「咸陽は此を去ること四十六萬里、山は高く、平地は三萬六千里。上に三つの角有り、方廣は萬里、形は偃盆の似く、下は狭く上は廣く、故に名づけて崑崙と曰うと。山は三角あり、其の一角は正北、辰の輝けるを干おかし、名づけて閩風の巔と曰う。其の一角は正西、名づけて玄圃堂と曰う。其の一角は正東、名づけて崑崙宮と曰う。其の一角は金を積む有り、天の墉城と爲り、面は

方千里。城の上に安金臺五所・玉樓十二所あり。其の北戸山・承淵山は、又た墉城有り。金臺・玉樓は、相鮮やかなること流るるが如く、精の闕光、碧玉の堂、瓊華の室、紫翠丹房、錦雲燭日、朱霞九光、西王母の治むる所なり、眞官仙靈の宗たる所なり。上は塔璣に通じ、元氣流布し、五常の玉衡あり。九天を理めて陰陽を調べ、品物群生し、稀奇特出し、皆な此に在り。天人濟濟として、具さに記すべからず。此れ乃ち天地の根紐、萬度の綱柄なり。……」

と、西王母の口を借りてその様子をつぶさに記す。これらはいずれも作者は假託であつて、實際には後漢から魏晉にかけての道士やそれと関係の深い下層の知識人が著したものとみられる。<sup>54)</sup>

六朝期に至つても、『初學記』卷二十七・金第一引『關令内傳』に

老子與尹喜登崑崙上。金臺玉樓、七寶宮殿、晝夜光明、乃天帝四王之所遊處。有珠玉七寶之牀。

老子尹喜と崑崙の上に登る。金臺玉樓、七寶の宮

詩語「崑崙」の誕生（大野）

殿、晝夜光明あり、乃ち天帝四王の遊ぶ所の處なり。珠玉七寶の牀有り。

と云い、崑崙自體の様子が描かれる。『關令内傳』は『隋書』經籍志・史部・雜傳に「一卷 鬼谷先生撰」と著録される。『漢書』藝文志には見えないことから、戦國期の縦横家で、六朝期以後道術を得た人として認識されるようになった鬼谷先生本人が著したとは考え難く、唐初の『藝文類聚』にもその書名が見えることから、六朝期に道士によつて假託されたものであろう。

このように知識としての崑崙の記述は巫祝から道士に引き継がれていった。上に挙げた仙話小説は道士がその教義を宣傳するために書いたものであり、そのくどさを感じる文體は、崑崙などの仙境について知識のない者にその素晴らしさを説くことを目的としたものと考えられる。

こうした「知識としての崑崙」は、志怪小説の勃興とともに、名のある知識人の著作にも記されるようになる。たとえば干寶『搜神記』卷十三には

崑崙之嶺、地首也、是惟帝之下都、故其外絕以弱水

之深、又環以炎火之山。山上有鳥獸草木、皆生育滋長於炎火之中。故有火澹布、非此山草木之皮橐、則其鳥獸之毛也。

崑崙の墟（虛）は、地の首なり、是れ惟れ帝の下都、故に其の外は絶つに弱水の深きを以てし、又た環るに炎火の山を以てす。山上に鳥獸草木有り、皆な炎火の中に生育滋長す。故に火澹布有り、此の山の草木の皮橐に非ざれば、則ち其の鳥獸の毛なり。<sup>②</sup>

と云う。神仙思想や道教の流行により、方士と知識人の知識が互いに影響し合うようになったこともその一因と考えられようが、漢帝國崩壊ののち分裂の時代が長く続き、一旦は天子の手中に収まった中國の邊遠そのものが再び想像の彼方に追いやられてしまったことも、こうした書物が歓迎される一因となったことであろう。

附記 本稿は京都大學中國文學會第三十一回例會（二〇一六年七月）における口頭發表「神山の變容—崑崙山の描寫を中心に—」をもとにしたものである。貴重なご意見を賜った諸先生方に篤く御禮申し上げる。また本研究はJSPS科研費

16K02833の助成を受けたものである。

### 註

- ① 崑崙には「崑崙」「崑崙」「崑崙」等の表記があるが、本稿では原文の引用を除き「崑崙」に統一する。
- ② 馬敘倫『莊子義證』應帝王篇。
- ③ 凌純聲「崑崙丘與西王母」、《中央研究院民族學研究所集刊》第二二期、一九六六年所收。
- ④ 赤塚忠「后稷と列子」、《日本中國學會報》第十九集、一九六七年所收。
- ⑤ 御手洗勝「地理的世界觀の變遷」、『東洋の文化と社會』、一九五七年所收。また同『中國古代の神々』、創文社、一九八四年、七一—四頁參照。
- ⑥ 『莊子』在宥では黃帝が廣成子に道に至る要諦を尋ねた場所として見え、『山海經』海內東經や『史記』封禪書にもその名が見える。
- ⑦ 小尾郊一「中國文學における自然と自然觀」、岩波書店、一九六二年、一〇頁。
- ⑧ 川合康三「終南山の變容」、同『終南山の變容』研文出版、一九九九年所收、九八—九九頁。
- ⑨ 中野將「山水・山川・山河」、後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ』東方書店、二〇〇〇年所收、九四—九五頁。
- ⑩ 『山海經』の底本には阮氏琅嬛館嘉慶十四年刊本郝懿行

『山海經箋疏』を使用した。

- ⑪ 郭璞は「言非仁人及有才藝如羿者不能得登此山之岡嶺巖巖也。(言うところは仁人及び才藝の羿の如きもの有る者に非ざれば此の山の岡嶺巖巖なるを登るを得る能わざるなり。)」と云い、また「羿一或作聖(羿は一に或いは聖に作る)」とも云うが迂遠のきらいがある。楊寛は仁羿を夷羿の字が變わったものとし(『中國古代史導論』、『古史辨』七上、上海古籍出版社、一九八二年(原著一九四一年)、三六六頁)、袁珂も「羿」の古文が「仁」字に似ていることを挙げてこれを支持する一方、郭注の引く「仁聖」に作る本でもまた通ずるとする(『山海經校注』、上海古籍出版社、一九八〇年、二九六頁)。仁羿を「仁」と「羿」の二種の人とするよりは、「仁」は「羿」に前置される形容詞と解するのが穩當であろう。

- ⑫ 『楚辭』の底本には借陰軒叢書本『楚辭補注』を使用した。俞樾は「里間」を「門」に改める。

- ⑬ 魯迅が「記海内外山川神祇異物及祭祀所宜、以爲禹益作者固非、而謂因《楚辭》而造者亦未是、所載祠神之物多用糈(糯米)、與巫術合、蓋古之巫書也、然秦漢人亦有增益。(海内・海外之神祇・異物や祭祀にふさわしい品を記しており、禹・益の作ったものとするのもちろん誤りだが、『楚辭』によって作ったものと言うのもまた正しくない。記載されている神を祀るための品物には多く糯米が用いられ、巫術とも符合する。恐らく古えの巫の書物であったが、秦漢の人が増

詩語「崑崙」の誕生(大野)

- 補したのである。)と斷じてより、伊藤清司「古代中國の民間醫療——『山海經』の研究(三)」(『史學』四三卷四號)・前野直彬『山海經・列仙傳』解説(集英社全釋漢文大系三三、一九七五年)・松田稔『山海經』の基礎的研究(笠間書院、一九九五年、一一二頁)等みなこれを踏襲する。
- ⑮ 黒須重彦『楚辭』、『中國の古典』二〇、學習研究社、一九八二年、一五頁。また小南一郎『楚辭とその注釋者たち』朋友書店、二〇〇三年、第二章「天問篇の整理」。
- ⑯ 底本は「濁澤有」に作るが、郝懿行の箋疏の説に従って改める。

- ⑰ 先秦期の道家系の文獻に見える有韻文の性質については、鈴木達明「道のための有韻文」(『東方學』第百十五輯所収、二〇〇八年一月)に詳論されている。

- ⑱ 『穆天子傳』の底本には『古今逸史』本を用い、必要に應じて他の諸書を参照した。

- ⑲ 底本は「豊□隆」に作るが、『山海經』西次三經「崑崙之丘」郭璞注の引文は「封豊隆」に作り、これに據って改める。

- ⑳ 『太平御覽』卷六九六の引文に據り「賜」字を補う。

- ㉑ 『太平御覽』卷二二の引文に據り「不」字を補う。

- ㉒ 底本は「鳥」に作るが、『山海經』海内西經「開明南有樹」郭璞注の引文に據って改める。

- ㉓ 「爰宥〇〇」という形式で豐饒や不死を思わせる動植物や玉などを列擧する表現は『山海經』海經と『穆天子傳』をお

いて他には見られないものである。詳細は拙稿「爰に理想郷有り」―『山海經』と『穆天子傳』の「爰有」―（『興膳教授退官記念中國文學論集』、汲古書院、二〇〇〇年所收）を参照されたい。

②4 『楚辭』離騷や宋玉「高唐賦」「神女賦」など、遊行をテーマにした古代の作品は、その快樂よりも悲哀の心情が多く描かれることが、谷口洋氏によって指摘されている。「試論早期辭賦中的神怪與悲哀」（『辭賦文學論集』一九九九年、江蘇教育出版社）参照。

②5 『文選』の底本には胡克家刻本李善注『文選』（中華書局一九七七年影印）を用いた。

②6 清末の吳汝綸が「離騷」の句をそのまま用いた句があることについて「此數句屈子必不再襲矣。」と疑問を呈し、後人が司馬相如「大人賦」を模したものである（『古文辭類纂評點』遠遊）。近現代の諸家も「遠遊」に神仙思想の雰囲気濃厚であることから、概ね漢代の作であって屈原の作とは考え難いとしている。

②7 以下司馬相如賦のテキストは『漢書』司馬相如傳（中華書局排印本二十四史）に據る。

②8 もつとも『漢書』司馬相如傳はこの賦を引いた後に「相如既奏大人賦、天子大說、飄飄有陵雲氣游天地之間意。（相如既に「大人賦」を奏し、天子大いに説び、飄飄として陵雲の氣天地の間に遊ぶの意有り。）と云い、諷諫の効果は

あまりなかったらしい。

②9 テキストは『後漢書』張衡傳（中華書局排印本二十四史）に據る。

③0 『老子』四十七章に「不出戸知天下、不闚牖見天道（戸を出でずして天下を知り、牖を闚わらずして天道を見る）」と云う。

③1 「（元鼎）六年冬十月、……遂定越地、以爲南海・蒼梧・鬱林・合浦・交址・九眞・日南・珠厓・儋耳郡。」（『漢書』武帝紀）

③2 『楚辭』離騷に「濟沅湘以南征兮、就重華而陳詞。……朝發軔於蒼梧兮、夕餘至乎縣圃。（沅湘を濟りて以て南征し、重華（舜）に就きて詞を陳べん。……朝に軔を蒼梧に發し、夕に餘は縣圃に至る。）と云い、『山海經』海內南經に「蒼梧之山、帝舜葬于陽、帝丹朱葬于陰。（蒼梧の山、帝舜陽に葬られ、帝丹朱陰に葬らるる。）と云う。同・大荒南經には「有阿山者。南海之中、有汜天之山、赤水窮焉。赤水之東、有蒼梧之野、舜與叔均之所葬也。爰有文貝・離俞・鳩久・鷹・賈・委維・熊・羆・象・虎・豹・視肉。（阿山なる者有り。南海の中、汜天の山有り、赤水焉に窮まる。赤水の東、蒼梧の野有り、舜と叔均の葬らるる所なり。爰に文貝・離俞・鳩久・鷹・賈・委維・熊・羆・象・虎・豹・視肉有り。）と云い、動物や礦物の豊かな樂園の性格がうかがえる。蒼梧の神山としての性格については拙稿「蒼梧考」



〔中國文學報〕第六十八冊、二〇〇四年〕を参照されたい。  
③③ 原文「條枝在安息西數千里、臨西海。……安息長老傳聞條枝有弱水、西王母、而未嘗見。」

③④ 以下揚雄賦のテキストは『漢書』揚雄傳（中華書局排印本二十四史）に據る。

③⑤ 『楚辭』離騷に「路不周以左轉兮、指西海以爲期。（不周に路して以て左に轉じ、西海を指して以て期を爲す。）」と云い、『山海經』西次三經には「又西北三百七十里、曰不周之山。」

北望諸毗之山、臨彼嶽崇之山、東望渤海、河水所潛也、其原渾渾泡泡。爰有嘉果、其實如桃、其葉如棗、黃華而赤柎、食之不勞。（又た西北三百七十里を、不周之山と曰う。北に諸毗の山を望み、彼の嶽崇の山に臨み、東に渤海を望み、河水の潛る所なり、其の原は渾渾泡泡（水の湧き出るさま）。爰に嘉果有り、其の實は桃の如く、其の葉は棗の如く、黃華にして赤柎、之を食すれば勞（つか）れず。）と云う。また『淮南子』原道訓に「昔共工之力、觸不周之山、使地東南傾。（昔 共工の力は、不周の山に觸れ、地をして東南に傾かしむ。）」と云う如く、共工が不周の山にぶつかって折つたために大地が東南に傾いた傳説が知られる。

③⑥ 『莊子』在宥に「堯於是放讎兇於崇山、投三苗於三峽、流共工於幽都（堯 是に於て讎兇を崇山に放ち、三苗を三峽に投じ、共工を幽都に流す）」と云い、堯に反抗した共工の流された場所として知られる。

詩語「崑崙」の誕生（大野）

③⑦ 駮・駒駮・蛩蛩はいずれも『山海經』海外北經に見える。

③⑧ 『漢書』地理志下に「淮南王安亦都壽春、招賓客著書。而吳有嚴助・朱買臣、貴顯漢朝、文辭竝發、故世傳楚辭。（淮南王安も亦た壽春に都し、賓客を招いて書を著す。而して吳に嚴助・朱買臣有り、漢朝に貴顯して、文辭竝びに發す、故に世に楚辭を傳う。）」と云い、また同・淮南王劉安傳に「初入朝、獻所作內篇新出。上愛祕之。使爲離騷傳。且受詔、日食時上。（初め安 入朝し、作りし所の內篇（淮南內篇）の新たに出だすを獻す。上 愛でて之を祕す。離騷傳を爲らしむ。且つ詔を受け、日び食時に上る。）」と云う。

③⑨ 『漢書』司馬相如傳上「上讀子虛賦而善之、曰「朕獨不得與此人同時哉。」得意曰「臣邑人司馬相如自言爲此賦。」上驚、乃召問相如。相如曰「有是。然此乃諸侯之事、未足觀、請爲天子游獵之賦。」……奏之天子、天子大說。」

④④ 高橋庸一郎氏は「相如は賦を通して實際を描いたのでなく一つの文學作品を作り上げたのである。……ただ残念なことはこの作品を見た武帝が、それを武帝自身つまり自分の實際の有様を描いているものと理解してしまつたことである。」と指摘する。『中國文學史上における漢賦の役割』晃洋書房、二〇一一年、二二二～二三三頁。

④① 劉向「九歎」離世には「思彭咸之水流」という句があり、漢代には彭咸が鵝夷に入れられた伍子胥のように水流に乗って遊行したとの認識があつたとみられる。

④② 『史記』伍子胥列傳に、死を賜わった伍子胥が「必樹吾墓上以梓、令可以爲器。而抉吾眼縣吳東門之上、以觀越寇之人滅吳也。（必ず吾が墓上に樹うるに梓を以てせよ、以て器を爲るべからしめん。而して吾が眼を抉りて吳の東門の上に懸けよ、以て越寇の入りて吳を滅ぼすを觀ん。）」と言つて自害したのに吳王が立腹して「乃取子胥尸盛以鴟夷革、浮之江中（乃ち子胥の尸を取りて盛るに鴟夷の革を以てし、之を江中に浮かぶ）」と云う。

④③ 原文「又怪屈原文過相如、至不容、作離騷、自投江而死、悲其文、讀之未嘗不流涕也。……乃作書、往往摭離騷文而反之、自嶠山投諸江流以弔屈原、名曰反離騷。」

④④ 曹操詩のテキストは黃節『魏武帝詩注』（中華書局『曹子建詩注（外三種）』二〇〇八年所收）に據る。

④⑤ 『吳越春秋』卷九に「乃行第一術、立東郊以祭陽、名曰東皇公、立西郊以祭陰、名曰西王母。（乃ち第一の術を行い、東郊に立ちて以つて陽を祭り、名を東皇公と曰い、西郊に立ちて以つて陰を祭り、名を西王母と曰う。）」と云い、この「東皇公」は東王父のこととみられ、東方の神とされている。また『海内十洲記』の扶桑の條にも「扶桑在碧海之中、地方萬里。上有太帝宮、太眞東王父所治處。（扶桑は碧海の中に在り、地は方萬里。上に太帝宮有り、太眞東王父の治する所の處なり。）」と云い、扶桑は東王父の治めるところとされる。一方、後漢期の畫像石や銅鏡には西王母と東王公（父）が對

になつて描かれているものが多く（小南一郎『中國の神話と物語り』岩波書店、一九八四年、七七―八一頁）、これらによつて西王母と東王父がペアで同じ場所にいるかのように誤解された可能性も考えられる。

④⑥ なお魏晉の詩には赤松子と王子喬を併稱する「松喬」が習見するが、多くは長壽の象徴で、崑崙とははつきり結びつかない。

④⑦ テキストは黃節『曹子建詩注（外三種）』（中華書局、二〇〇八年）に據る。

④⑧ 本集は「首」に作るが、『樂府詩集』卷六十四により「漱」に改める。

④⑨ 小南一郎氏は「その主たる原因は、知識人としてのみずからの存在を、屈原傳説という枠組みの中で表明するという表現方式自體の限界によるものであったのだろう」と指摘する。「楚辭とその注釋者たち」、朋友書店、二〇〇三年、二九四頁。

⑤⑩ 『神異經』は西荒經に「華曰、陳章與齊桓公論小兒也（張）華曰く、陳章と齊桓公 小兒を論ずるなり」という張華注とみられる文があり、『太平御覽』卷三三七引張華『博物志』佚文にもこれに符合する文が見られること等から、遅くとも西晉の張華以前には成立していたとされる。王國良『神異經研究』天津出版社、一九八六年、七―八頁參照。『海内十洲記』の成立時期と時代については後漢から六朝

期まで諸説あるが、筆者は主要な部分は後漢から魏晉までに成立し、魏晉から南北朝期に漢武帝に關する説話が付加されたと考える。拙稿『海内十洲記』の文體について」（『桃の會論集』第五集、二〇一一年所收）参照。

- ⑤ 『藝文類聚』卷三十六・隱逸上引袁淑『眞隱傳』に「鬼谷先生、不知何許人也。隱居韜智、居鬼谷山、因以爲稱。蘇秦張儀師之、遂立功名。（鬼谷先生は、何許の人かを知らざるなり。隱居して智を韜み、鬼谷山に居る、因りて以て稱と爲す。蘇秦・張儀之を師とし、遂に功名を立つ。）」と隱者として記され、梁の道士陶弘景が『鬼谷子』に注をつけ、唐の杜光庭が『錄異記』『仙傳拾遺』等にその事跡を記すに至って神仙と認識されるようになった。
- ⑤<sup>2</sup> 現行の『搜神記』は宋代に散佚したものを明代に輯佚したものであるが、この文は『三國志』魏書四裴注や『法苑珠林』卷三七にも引かれており、干寶の文とみてよい。